

ロマン・ロラン生誕130年  
財団法人設立25年  
記念

# ユニテ 24

1997.3

特集 〈ロマン・ロランとアジア〉



ロマン・ロラン研究所

## 目 次

経済学から見たロマン・ロラン ——戦間期のリベラル——	1
ロマン・ロランと魯迅	18
ロマン・ロランとの出会いから ——なぜ、わたしは博士論文にロランを選んだのか——	25
韓国から講師、鄭承姫さんを迎えての覚え書	33
ベートーヴェンの二つのソナタ ——ロランとアドルノ——	37
——ロマン・ロラン生誕二三〇年記念コンサートで——	
「ロラン生誕二三〇年記念コンサート」に	42
今、又、ロランの精神を必要とする時	46
トルストイの『クロイツェル・ソナタ』とロマン・ロラン	51
ロマン・ロラン略年譜	57
ロマン・ロラン研究所の活動	64
ロマン・ロラン研究所設立趣意書	66
1996年度 賛助会員、寄付者名簿	67
あとがき	68

本山美彦 …… 1

區 建英 …… 18

鄭承姫 …… 25  
(李 珣淑・濱田 陽訳)

宮本 エイ子 …… 33

岡田 暁生 …… 37

井土 真杉 …… 42

杉本 峯子 …… 46

清原 章夫 …… 51

# 経済学から見たロマン・ロラン

— 戦間期のリベラル —

本 山 美 彦

はじめに

地上を這う生活を直視することを義務とするために、  
ともすれば俗物になりがちな経済学者にとつて、天空を  
駈ける魂を追う文学者の集まりの場で話をさせて戴くこ  
とは大変な名誉であり、まるでスペースシャトルに乗つ  
て宇宙を旅する直前のような誇らしい興奮状態にいまの  
私はある。そしてまた、白鳥の群の中に迷い込んだ醜い  
アヒルの子の心境をも味わっている。

話に入る前に演題にある「リベラル」という言葉の私  
なりの定義を設定しておきたい。平生心とか平常心とか  
という言葉で表される心もち続ける人を私はリベラルと  
名づけたいと思う。時代の興奮を醒めた眼で観察し、俗

を拒否せず、俗に墮さず、人間の魂のもつとも高尚な部  
分をつねに追い求める良識人。リベラルとはこのような  
人を言い、ロマン・ロランその人に典型例を見る。

「戦争の文学」の中で、戦争時にもつとも激越な感情  
を表明した文学者は、いずれの国でも、すでに一定の地  
歩を築いた長老級であったという事実にはロマン・ロラン  
は注目している。実際、文学者だけでなく、アカデミズ  
ムの世界や、芸術・科学の分野でも、長老級の多くが声  
高に自国の戦争を賛美し、国民の戦意昂揚に邁進した。

「著明な、栄誉を得たほとんどすべての詩人たち、年  
齢と名声において豊かな人々は、戦争が開始されるや否  
や、羽のように潮流に流された。しかも若干の人々は、  
それまで憐憫と人道主義の平和の使徒だっただけに、こ

の事實は一層不思議である」(「戦争の文学」、「ロマン・ロラン全集、第一八卷、エセーI、政治論、一九一四—一九三五」みず書房、一九八二年、八二ページ)。

この問いを發したロマン・ロランに経済学者としての私は興味を抱く。今日の報告は、二つの問題領域を開示し、経済学がそれぞれの領域をどのように処理したのかを述べ、その面において、ロマン・ロランが経済学の処理方法と非常に近い理解をもっていたことを強調するというスタイルによって、ロマン・ロランの豊穡さにもう一つの豊かさをつけ加えることを課題とする。

## I. 抑圧の恐怖

### 一 正しき人の愚行

— 眞摯なカルヴァンが生んだ悲惨さ

社会的な混乱に人々が悲鳴をあげているときに、強い暗示力に富む一人の人間が立ち現れて、自分こそは新しい眞実の体系を發見したと強烈に宣言しさえすれば、何百万人もの人たちが、魔法をかけられたように、この自

称民族救済者に帰依するようになる。しかも、この預言者が人々に多くを要求すればするほど、彼らはそれだけ多く感激してしまう。民衆は、おそまつな現実をいとも簡単に変えることのできた思想の体現者を心から賛美するようになる。しかし、権力を手中にした理想家は、より多くを民衆に望むことによって、民衆の精神への最悪の裏切り者になる。それは、悲しいほど過去から現在まで繰り返されてきた社会思想の宿命であった。

「すべての宗教的・政治的イデオロギーが独裁の形をとるようになる」と、すぐに暴政に墮してしまふというこの呪われた運命は永久に繰り返される」(ツヴァイク、「権力と闘う良心」みず書房、一四ページ)。

自己の思想に対立したセルベートを焼き殺したカルヴァンの暴虐に多くの知識人たちが震撼したのは一五五三年のことであった。イギリスのギボンが異端審問所での何千人もの生贄よりもこの虐殺が衝撃であったと告白しているし、ヴォルテールは宗教改革派による最初の宗教的殺人であり、宗教改革の根本思想の公然たる否定であることに驚愕した。

もともと、宗教改革の根本思想であつた福音主義は、人間に自由な宗教的解釈を求めるものであつた。この思想からすれば異端者という概念はそもそも成立するはずがなかつたものである。ルターにせよ、ツウイングリにせよ、そしてもちろんカルヴァンですら異端者が処刑されるべきことをきつぱりと否定していたのである。権力を握る前のカルヴァンの「キリスト教綱要」初版には、

「異端者を殺すことは犯罪である。処刑刀や火焰によつて異端者を抹殺することは、人間性のあらゆる原理を否定することに他ならない」と書かれていたのに、権力を掌握した後での第二版以降ではこの箇所は抹殺されていく。カトリック教会ですら異端者を虐殺するのに千年以上もためらつたのに、カルヴァンは宗教改革後わずか一〇年でこの道程を終えたのである。

「カルヴァンは、神に属するものをこの世の上に行きただけ高く崇めるために、地上的なものを計り知れないほど低く貶めた。神という觀念に最高の位を与えるために、人間という觀念の権利を剥奪して、これを辱めてしまつた。この人間嫌いの改革者は、人類を救いがたい、

手に負えない罪人の集団であるとしか見なかつた。そして彼は、無数の泉からとどまることなく進み出るこの世の歡樂を、修道僧的嫌悪と恐怖の感情をもつて一生の間憤り続けた」(同上書、六九―七〇ページ)。

「人間を好きなようにさせていたら、その魂は悪の他にはなに一つできない」と考えるカルヴァンは、人間を有刺鉄線の内側に囲い込んでしまつた。宗教評議会によつて、風紀、生活、信条が監視され、違反した人々は容赦なく市から追放された。

至る所に宗教評議会に買収されたスパイがいて、人間狩りが行われた。密告が横行した。嫌疑を晴らすために人々は進んで密告した。あらゆる市民が自発的な監視者となつた(同、七七ページ)。

出版物は厳しい検閲を受けた。精神の自由をわずかでもほのめかす会話は禁止された。カルヴァン批判は最大の犯罪であつた。市参事会の前以外の社会問題への言及は禁止された。つまり、なにもかもが禁止されていた。典獄は囚人で溢れた。カルヴァンはじつにつまらないことを罪とした。説教中に居眠りをすれば拘留。トランプ

遊びをすれば拘留。ヴァイオリンを引けば国外追放。街頭で歌えば国外追放。つまり、息を吸う度に市民は罪を宣告されたのである。酒に酔ってカルヴァンを罵った男は灼熱した鉄棒で舌に穴を開けられて追放された。拷問の手段としてカルヴァンは、拇指を潰す器具、体を引き伸ばす器具、足裏を炙る器具の採用を勧告した。

そもそもジュネーブ市民は世界に先立って、一五二七年に二〇〇人議會を設置した市民的自由を謳歌していた人たちであった。そのような自由な市でどうしてこのような馬鹿げたことが可能だったのだろうか。考えられる理由は、絶えず続く毎日の威嚇が人々の精神力を破壊してきたということであろう。いつ自分が告発されるか分からないほどの恐怖政治が日常化するとき、どのような気丈な人々も意気喪失してしまうのではないだろうか。市民はかつての快活さを失い、陰鬱なまなざしに変わってしまった。ツヴァイクは告発する。

「カルヴァンがこの町に押しつけた厳格な節度と節制のお蔭で、儀と規律は申し分のないものであった。しかし、高貴な力は生み出されなかった。この力は行き過ぎ

と過剰によってのみ生み出されるものだからである。この高貴な力を犠牲にすることによって上記の規律は保たれたのである。この町は、敬虔で神を恐れる無数の市民と勤勉で真面目な神学者や学者たちを生み出した。しかし、カルヴァンの死後二世紀以上も、世界的な名声をもつた、ただ一人の画家、ただ一人の音楽家、ただ一人の芸術家も生み出していない。異常なものが平凡なもの犠牲とされ、創造的な自由が従順な奴隷根性の犠牲とされたのである。その後ついにこの町にも一人の芸術家が生まれたが、その芸術家の全生涯は、個性の抑圧に対する類いのない反逆的なものであった。この独立不羈の市民、ジャン・ジャック・ルソーによってジュネーブはカルヴァンから完全に解放されることができたのである」(同、八八―八九ページ)。

人間のもつ卑しい欲望が、正義の名において拒否されるとき、社会は、しばしばカルヴァンによって支配されたジュネーブのように痙攣してきた。逆に、人間の欲望が認知されるとき、社会はそれなりの安定を示してきた。ここに、人間精神の重大なパラドクスが存在する。そし

て、その問題を自己の中心テーマに捉えたのが経済学であつた。

## 二 欲望の認知—スミス経済学の生誕

経済学のみが、人間の悪徳をマイナスとしてでなくプラスとして見る唯一の学問体系であると私は信じている。そもそも、この視点は、経済学の始祖、アダム・スミスから連綿と受け継がれたものである。つまり、具体的な生活から成り立つ社会の原理は、抽象的な真・善・美ではなく、お金をいかに貯めるかといった低級な貨幣欲にあるといった、倫理学者から見ればとんでもないことを立論の基礎に捉えたのが経済学である。

アダム・スミスは、「経済学の生誕」として後世呼ばれることになつたその著、「諸国民の富」（一七七六年）第一編第二章で、現代社会は無数の人間の協業的労働（協働）の連鎖の上に成り立っており、他からの協働をいかに豊富に得ることができるか否かが生活の豊かさの岐路となると断定してつぎのように言つた。他人のそうした協働を引き出すのは、人間関係で築きあげる友愛で

はない。友愛で結びつくことができる人間の環は小さいものだからである。美しいが力のない友愛よりも、他人の欲望を刺激し、欲望に訴えることの方がはるかに他人の協働を引き出せる。

「文明社会では、人間は大変な数に上る人々の協働や援助を必要としている。しかし、自己の全生涯をかけても、人間は少数の人々の友情を勝ち得ることさえ難しい。……（略）……人間は、つねに同胞の援助を必要としているが、それを同胞の仁愛（Benevolence）だけに期待しても徒勞になる。むしろ、他人の自愛心（self-love）を刺激して、その人が自分にとって有利であると思う行動を取らせ、その行動が結果的に他から自分に求められていることと一致していることが示されれば、一層効果があると思われる。およそ、どのような人でも、他人にある種の取引を申し出る場合には、以下のようなことを提案するものである。私の欲しいものを下さい。そうすれば、あなたの欲しいものをあげましょう。……（略）……こういう風にしてこそ、われわれは、自分たちが必要とする世話のはるかに多くのものを互いに受け取りあうので



ある。われわれが、食事を調達しようとするとき、肉屋や酒屋やパン屋の仁愛にはなく、自己の利益を追求する彼らの考え方に訴えているのである。われわれは、彼らの人類愛にはなく、その自愛心に話しかけ、しかも、彼らにわれわれ自身の必要を語るのではなく、彼らの利益を語ってやるのである。主として、市民同友たちの仁愛に頼ろうなどと考えるのは、乞食以外にはいない。否、乞食でさえ、全面的にそれを頼ろうとはしない。なるほど、好意ある人々の慈善が、彼にその生存に必要なすべてのものを供給できるかもしれない。……(略)……しかし、それで、彼が必要とする通りのものを調えることはできない。彼のそのときどきの欲望の大部分は、他の人々の場合と同じようにして、つまり同意により、交換により、購買によって充足される。ある人が恵んでくれた貨幣で彼は食べ物を買う。別の人が恵んでくれた古着を、彼は、もっと体に合う他の古着と交換するか、あるいは、その日の宿、食べ物、もしくは貨幣と交換し、そしてこの貨幣で、必要に応じて食料・衣服・その日の宿のいずれかを買うことができるのである」(アダム・ス

ミス、大内兵衛・松川七郎訳、「諸国民の富」岩波文庫、第一分冊、第一編第二章、一一八—一九ページ)。

この章句は、非常に重い意味を含んでいる。この一節によって、「諸国民の富」は、反キリスト教的な出版物として、発刊の一七七六年(米独立宣言の年)からウェイクフィールド (Arthur Gibson Wakefield) による編集が行われた一八三〇年代まで、じつに六〇年以上もの長きにわたって一般の人々の目に触れるようなことはなかった。スミスのこの書では、キリスト教がもつとも強く忌避する貨幣欲、つまり、人間のもつとも卑しい欲望が社会秩序維持の基本に捉えられており、人間相互間の友愛ないしは仁愛の効果が貨幣欲よりもはるかに低く評価されてきたからである。

このように、人間のドロドロとした欲望を頭から拒否せず、欲望がもたらす熱情を逆手に取って利用しようとする点が、他の分野の科学とは基本的に異なる経済学の特徴である。人間の悪魔的な行動を、認知し、正しく位置づけることができる唯一の学問が経済学であると私は信じている。思うに、金銭的な蓄積、あくなき消費欲望



は、反倫理的なものとして、人類史ではつねに糾弾され、貶められてきた。

商行為をする場所であるマーケット (market) とは、文字通り (marketed)、印をつけられた、卑しくて、当局の監視を必要とする場所であった。マーケットでは、人間のもっとも卑しい貨幣欲が渦巻く所であると、当局のみならず、社会のあらゆる成員が思い込んでいたのである。この思い込みが打破され、商行為こそが、人間の進歩と平等をもたらすものだという認識が一般化したのは、やっと十九世紀になってからであった。なるほど、自己を神に捧げる敬虔な宗教者から見れば、貨幣欲は人間のもっとも恥ずべき衝動である。しかし、宗教に人々が帰依し、敬虔な生活が送られていた時代、つまり、人類史上もっとも宗教的な時代であった中世こそが、人間のあらゆる尊厳が踏みにじられていた時代であったという史実を、私たちはけっして見過ごしてはならない。卑しき欲望が否定され、人に敬虔さが要求された時代こそ、事実において、多くの人々が、抑圧に苦しめられていたのである。

貨幣欲が認知されている現代社会は、宗教的見地からすれば、墮落の極みに達したものとされる。しかし、そうした社会こそが、人権の尊重と、平等な社会秩序を実現させたと言える。現代社会では、一族の榮耀榮華が三代と続かない。そして、民主主義は確実に進行している。ここで、慌てて弁明しておかなければならないが、私はけっして「市場信仰」者ではない。その逆である。現実の市場は平等なものではないし、社会に平等をもたらすものでもない。市場はそれゆえに、一定のルールを設定され、制御されなければならないと私は考えている。しかし、欠陥があまりにも多い市場メカニズムではあっても、市場を通さない抽象的な真・善・美の美辞麗句が社会にもたらしてきた過去の害悪に比べれば、それは、はるかに人類の進歩にとって有益であると私は強く主張する。

商人は、分かる言葉で話されないかぎり動かない。複雑な楔形文字を単純なアルファベットに変え、文字から離脱できなかつた数字を単純な十進法とゼロの応用によって独立させただけでなく、それによって、従来よりも

はるかに複雑な数の世界を表現できるようにしたのは、フェニキアやアラビアの商業民族であった。分かりやすい単純なものを発明し、それを世界的に普及させた勢力こそが実利的な商人であった。

現代になるほど、人々は字が読めなくなつた。哲学的思考など人はますますできなくなつてしまつた。多くの人々の脳構造もいよいよ単純化してしまつた。一口に言つて人々はますます知的に衰退しつゝある。それでも、一握りのインテリが指導していた時代よりもはるかに現代社会の進歩の方が速い。

### 三 ロマン・ロランが感じた

#### 真摯なガンジーの恐ろしさ

私が、経済学者としてロマン・ロランに惹かれたのは、多くの人文学者と違つて、ロマン・ロランには、真・善・美とその体現者を相対視する姿勢があるという私的な発見からである。

インド独立運動で、ガンジーの片腕となるはずであつたが、一九二一年に夭逝したローカマニア・B・G・テ

イラクとガンジーとをロマン・ロランが比較した箇所は、上記の視点を裏づける点で私には興味深い。テイラクは、生きながらえておれば、大衆行動の指導者となつたであろうし、そうすれば、ガンジーは少数の精神的選良の指導者に自己限定していただであろうというのが、ロマン・ロランの判定であつた。

(テイラクは)「生まれながらにして民主主義者であつた。彼はまた宗教的要求を顧慮しない断固たる政治家であつた。彼は、政治は聖者のためのものではないと言つた。この碩学は、祖国の自由のためには真理さえも犠牲にしたであろう(彼はそう公言した)」。

「ガンジーは、テイラクとは反対に、真理のために自由を犠牲にするであろう。祖国に対して敬虔な愛を抱いているにしても、彼は自己の信仰を祖国よりも高く置くのである。……(略)……【私の宗教は地理的境界をもつていない。もし私の信仰が生きているなら、それはインドに対する私の愛さえをも凌駕するであろう】」(宮本正清訳、「マハトマ・ガンジー」)「ロマン・ロラン全集、第一四巻・伝記I」みすず書房、一九八一年、四五九―

四六〇ページ)。

ロマン・ロランは、ガンジーの真摯な宗教精神が現実の政治に埋め込まれるときの危険性をタゴールの言葉で語っている。

「マハトマ・ガンジーの生活が示し、世界のすべての人々のうちで、ただ彼だけが示しうる精神的熱誠は私たちに必要である。このような尊い宝が、わが政治の脆い船に積まれて、激しい怒濤の絶えない波浪の上に投ぜられたことは、魂の火によって死者たちに生命を蘇らせることを使命とするわが国にとっては不幸である。……精神力を盲目の力に変えるのは罪悪である」(同上書、「ガンジー」、四九六ページ)。

ロマン・ロランはタゴールのこの言葉の意味について解説している。

「彼は、ヒステリックな激怒の発作に罹り易い弱い民衆にそれが及ぼす結果を恐れた。民衆の考えを復讐や不可能な償いから逸らせ、ひたすら、もつとも偉大な祖国の魂を建設することを考えさせるようにしたかった。……彼はすべてがノンとなることを恐れた」(同、四九六

ページ)。

タゴールは、ガンジー精神一色で彩られるようになったインドを慨嘆した。

「愛によるこの不思議なインドの目覚めの調べが海を越えて私のところまで漂うてきた。……(略)……新しい自由の軽やかな微風を吸う期待を抱いて、私は喜びに満ちて帰った。ところが帰国して私が見出したものは私を落胆させた。……みんなが同じ調子で話し、同じ道を進んでいるように思われた」(同、五〇〇ページ)。

実際、信仰は少数の選ばれた人々にこそ無限の自由をもたらすが、それを歓迎する大衆にとっては、また一つの束縛になりうる。ロマン・ロランは、この認識においてタゴールと同一であり、タゴールが群衆の狂信批判を越えて、聖者ガンジーにまで批判の矛先を向けたという事実を非常に真剣に受けとめた。ガンジーがいかに偉大であっても、インドが直面している問題を一人の指導者の手に委ねてしまうことの危険性を強く意識するタゴールにロマン・ロランは全面的に同調したのである。

「スワラージ(インド自治)を立てる学問と技術は広

大な問題である。その小径は險しく、日時を要する。そのような仕事には、熱情と感激がなくてはならないものであるが、研究と思惟もそれに劣らず重要である。その仕事のために、経済学者は考察し、労働者は働き、教育者は教え、政治家は政策を作成すべきである。約言すれば、国家の精神力はあらゆる方面に用いられなければならない。至る所に探求の精神を、無償で束縛なく保存しなければならない。有形無形の圧迫によって、知性が臆病にさらわれてはならない。……(略)……(糸を紡ぐこと)これがはたして新時代の新しい想像への呼びかけであろうか。もし大機械が西洋の精神にとって危険をもたらしているものであるなら、小機械は私たちにもっと悪い危険をもたらしているのではないだろうか(同、五〇〇—五〇一ページ)。

タゴールの非難に対して、ガンジーは、いまは火急の時なので、国民全体が一致団結して、糸を紡がなければならぬと答えるのみであった。

「糸を紡がなければならぬ。何人も紡ぐべきである! タゴールも紡ぐがよい、他の人々と同じように!

彼も外国製の衣服を焼くがよい!……それが今日の義務である。明日のことは神が計らって下さる。ギターにいう通り、正しき行為をなせ!」(同、五〇三ページ)。

そして、慎重に、ロマン・ロランは、ガンジーとタゴールとの差を、禁欲できない他者への共感の広さ(狭さ)に見るようになった。

「私の考えでは、ガンジーもタゴールと同じく世界主義者であるが、しかし、そのあり方が異なる。彼は道徳意識において、タゴールは知性において世界主義的である。ガンジーは祈祷と日々の勤勞の社会から誰も除外しない。ちょうどキリスト教初期の使徒が、ユダヤ人と異教徒とを区別しないで、すべての人々に同じ道徳律を与えたのと同じである。ガンジーが望むのはそれである。しかし、まさしくそこに彼の狭さがある。彼の心はキリストの心のように広いが、その知的禁欲主義と克己自制の精神において狭い(キリストもまたそうであった!)。ガンジーは一種の中世的世界主義者である。彼を心から畏敬しながらも、私たちはタゴールに味方するものである」(同、五〇七ページ)。

タゴールの述懐を引用するロマン・ロランの脳裏には、シュテファン・ツヴァイクの「権力と闘う良心」で問われた主観的正義のもつ恐ろしい落とし穴、つまり、自由の使者が他者の自由を剝奪した経緯への思いがあったのであろう。

「至る所で私が耳にしたのは、理性と教養に鍵をかけなければならぬということであった。盲従すること以外にはもはやなにも必要でなかった。表面の自由の名において、人間の自由を粉砕することはじつに容易である」(同、五〇〇ページ)というタゴールの章句の引用の後、ロマン・ロランはつぎのような文を付加した。それは、ロマン・ロランの精神の凝縮であると私には思われる。

「私たちは、こうした憂慮と、こうした抗議を知っている。それはあらゆる時代にある。古代社会の末期に、自由な精神の最後の人々が、新しいキリスト教の世界の到来にあたって、同じような声を発した。今日のように社会的または国家的盲信の高潮に揺られる人間の波を見ると、われわれはそうした反感が心に募るのを覚える。これは、自由な魂自身が生んだ信仰の時代に対して、自

由な魂が感じる永久の反抗である」(同、五〇〇ページ)。  
ガンジーは結果的に勝利を手にした。しかし、ロマン・ロランの恐れは、ガンジーが権力を掌握した後の社会の性格についてであった。正義感溢れる熱情家が、権力掌握後にはしばしば苛斂誅求の政治を平然と行ってきたことの恐怖、ロマン・ロランは東洋で生起する西洋文明批判、その代表であるガンジーの深い思想に傾倒しながらも、真摯な思想がともすれば犯す非常に危険な傲慢さをガンジーの作り出す雰囲気に見て取った人である。

## II 集団ヒステリーの恐怖

### 四 文明の底流にある破壊衝動

世紀末には、ありとあらゆる思想が噴出した。しかし、それらは、人生を、社会を、無視していた。人間がいかに危険なものになりうるか、しかしまた、人間がいかにその危険を克服できるか、という思想をこの時代は、結局のところもてなかつた。

たとえば、世紀末思想が満面開化したウイーンでは、

若いドイツ人の世代であったヘルマン・パールが、育ちつつあるあらゆる新しいものの、新しい見方を紹介していた。彼はウイーンで分離派の美術を公開し、ノルウェーのムンク、ベルギーのロプスを紹介した。音楽では、ドビュッシー、シェーンベルクの新しいリズムが、文学においてはストリンペリとハウプトマンのリアリズムが、若い人々の感性を捕らえた。詩人としては、ホーフマンスタールが弱冠一六歳で天才的な詩句を書き、キーツやランボオの早熟を凌ぐとの絶賛を浴びていた。若きウイーン派の首領であったアルトゥール・シュニツラーをはじめ、先のパール、そして、シュテファン・ゲオルゲらがこの天才詩人を歓呼の声で迎えた。

新しい芸術は新しい若い世代によって担われた。それまでは、詩人にせよ、音楽家にせよ、大人の市民社会で試され、市民社会の落ち着きの中で市民権を得るためには老成しなければならなかった。慎重な時代には、堅実な業績の集積が世に出る資格だったのである。しかし、世紀末では、ただそれが新しいという資格で十分だった。ただし、これら多くの若い天才たちは、二十歳台半ばで

才能を消耗させている。つまり、未成年に特有の魔法的な知恵が、青春の一回限りの奇跡を起こしただけのことであった。一つの才能に飽きると、世界はまた新しいものを貪欲に求めた。忘れることもまた速かったのである。新しさを求める文化とは、不気味な地鳴りを直観的に察知し、それに怯えたがために、人が無意識に利那的になることから発生するのだろうか。

アルフレッド・ノーベルを説得してノーベル賞を設立させたオーストリアの老女性作家、ベルタ・フォン・ズットナーは、世界大戦の危機をもっとも早くから感知していた。その、著書、『武器を捨てよ』によって、彼女が警告したにもかかわらず、彼女の故郷の誰も耳をかさなかった。現実には、ヨーロッパの各地で他の国家に対する偏狭な憎悪が、第一次世界大戦前に爆発寸前にあった。ツヴァイクは、戦争直前の一九一四年の春、フランスのトゥールで、当時のドイツ帝国皇帝のウィルヘルム二世が数秒間映ったニュース映画の場面で、市民たちが憎悪の声を一斉にあげたことに恐怖感を覚えたと告白している。ツヴァイクの親友であったロマン・ロランは、

ツヴァイクからそのことを聞いて、民衆が素材であればあるほど、事態は簡単に悪化すると指摘して、群衆ヒステリーの恐ろしさを語ったという（シユテファン・ツヴァイク、「昨日の世界」みずす書房、三二四ページ）。サライエボであの銃声が起こったのは、一九一四年七月二十八日であった。そのときまで、ほとんどの知識人たちは、事態を予測できていなかった。しかも、戦争に躊躇するどころか、彼らは、民衆の集団ヒステリーに簡単に便乗してしまつたのである。

ツヴァイクの証言によれば、戦争動員令が出た直後の民衆の顔は、興奮で紅潮していたという。若い新兵の行進に町中の人が、歓声を送った。全員が、高揚した感動をもつた。各個人が自我の高揚を自覚し、見知らぬ人同士でも友愛の奔流を感じ、平凡な生活に疲れていた無名の人たちが、自分の人格に一つの意味、つまり一つの民族であり、そのための英雄的行為を自分がなしよう、という意味を自覚した。陶醉が社会には溢れていた。

しかし、この陶醉は、もつと深奥の暗い情念の氾濫であつたのかもしれない。それは、フロイトが、「文化に

対する不快感」と呼んだ、規則づくめの市民的社會から飛び出した、非日常的行動に身を灼きたいという獸的な無意識の根源的衝動、つまり、原始の血の本能を掻き立てるものであつたのかもしれない。時代の最大の犯罪が、一時的にせよ人々を激怒させるのではなく、陶醉させたのである（「昨日の世界」、三三〇―三三一ページ）。

「芸術は我々各個人を慰めることができますが、現実というものに対してなにもなしません」（ツヴァイクの証言、同上書、三〇三ページ）というロマン・ロランの自己規制にもかかわらず、若いウィーン派やドイツの詩人たちは、この戦争気分を一層高揚させることに、芸術の意味を見出していた。ハウプトマンやデーメルといった世紀末を主導した詩人たちは、クリーク（戦争）とジーク（勝利）、ノート（苦）、トート（死）、といったような他愛ない韻合わせに狂奔して、原始ゲルマンの血を掻き立てようとした。彼らは、ドイツの芸術こそが世界最高のものであることを力説した。エルンスト・リッサウアーは、「イギリスに対する憎しみの歌」によつて国民的大詩人の座に駆け上つた。当時のすべてのドイツ



人が、この国民詩を覚えさせられた。戦争前は過激な新しさを書く人々がもてはやされ、今度は過激なドイツものが人々の尊敬を集めるようになった。ただし、敗戦後のドイツでは、それまでリツサウアーを称えていたすべてのドイツ人が、これみよがしにこの詩人を罵倒したのであるが。天才のホーフマンスタールは、いち早く、ドイツ精神を云々していた。抵抗詩人トーマス・マンですら、当時はフリードリッヒ大王論で、ドイツの正当な権利を主張していた。

しかし、個人にせよ民族にせよ、この種の集团的ヒステリーをいつまでも延ばすわけにはいかない。こうした異常な陶酔は、いずれ冷めてしまうものである。このために、権力は、つねに新しい陶酔を与えるための投薬をし続けなければならなかった。それは、民衆の中に他国に対するできるかぎりの憎悪を掻き立てることであった。そのために、芸術家や学者が動員された。断固たる個人主義者が、断固たる愛国主義者に変えられていった。そのさい、敗北主義者というレッテルを張られることが、知識人にとってもっとも苦痛となっていた。商店の看板

からは外国文字が消えて行つた。ダンテがゲルマン人であつたとの説が説得力を帯び、敵国への賠償額が大衆の鬱憤ばらしに使われた。戦争前には戦争反対であつた社会民主主義者たちは、祖国のない連中というレッテルを貼られるのを恐れるあまり、民衆よりも声高にドイツの偉大さを騒ぎ立てた。オーストリアでこの集団ヒステリーに罹らなかつたのは、ツヴァイクの述懐によれば、彼と彼以上に寡黙なリルケだけだつた。フランスのロマン・ロランのみが寡黙に赤十字の仕事をしなから、「戦いを超えて」を執筆していたのである（ツヴァイクの証言、「昨日の世界」、三五七—三五九ページ）。そして、世界を襲つた戦争はひとまず終結した。

##### 五 「戦いを超えて」

第一次世界大戦への抗議を籠めて発表した一連の激越なロマン・ロランの短文は、「戦いを超えて」と題されてまとめられているが、その最初のもものは、ゲルハルト・ハウプマンに宛てたものである。ハウプトマンは四節で触れたように、ドイツの国民的詩人であり、芸術家

の中ではドイツ精神の昂揚を訴える点でもっとも先陣を切っていた。一九一四年八月、ドイツは突然、中立国ベルギーに侵入し、其の聖都、ルーヴァンを廃虚にして、ルーベンスの作品を灰燼にしてしまった。ベルギー侵攻への世界の批判に対して、ハウプトマンは、弁明を繰り返し、野蠻と批判されるドイツは、あらゆる層が一体となつて、ヨーロッパ「文明」へのドイツ「文化」の対置のための戦争であるとの論文を発表していた。

「私は、マーテルリンク氏に保証する。かの『文明国』の行為をドイツでは誰も真似しようとは思っていないことを。われわれは、敵の女や子供たちを神聖と見る野蠻なドイツ人であり、それにとどまることを選ぶ。……(略)……みんなが一つの高貴な豊かな国家のために、人類の進歩と工場に資する内的・外的富のために、十分な自覚をもって闘っている」(ハウプトマンの言。『ロマン・ロラン全集、第一八巻、エッセーI、政治論、一九一四—一九三五』みすず書房、一九八二年、宮本正清訳、【戦いを超えて】、一三ページ)。

ロマン・ロランは、このハウプトマンに質問状を送つ

た。文化財の破壊は人間精神を殺す野蠻な行動であるとして、ドイツ政府の暴虐に対して批判することを求めたものであった(「ゲルハルト・ハウプトマンへの公開状」【戦いを超えて】、一二ページ)。

トーマス・マンもドイツの戦争を美化していた。「人間は平和において低下する。怠惰な休息は勇氣の墓である。法律は弱者の友であり、一切を平坦にしようとし、できうるかぎり世界を平和にするであらう。これに対して、戦争は力を出現させる」(「Pro Ais (祭壇のために)」【戦いを超えて】、一七ページ)。

それにしても、ドイツの知識人たちのことごとくが、なんの抵抗もなく、いとも簡単にドイツ国家の政策の先兵になつてしまった。ロマン・ロランの怒りはここに集中していた。

「知識人たちにも罪がある。なぜなら、いずれの国においても、その新聞や首脳部がまぐさとして与える情報を受け取る善良な人々がだまされるのは仕方がないが、誤謬の中から真実を探し求め、利害関係や幻覚的热情による証拠にいかなる価値があるかを知ることを職務とす

る人々までもが騙されるのは許し難いことである。彼らの第一の義務（誠実と良識の義務）は、諸民族と精神の宝の破壊を掛け金としたこの戦慄すべき戦いに判断を下す前に、双方の側の調査をなすべきであつたろう。盲目的忠誠から、無邪気な信頼から、彼らは、彼らの帝国主義が打った網にまっしぐらに飛び込んでしまった。彼らにとって第一の義務は、目を閉じて、一切の非難に対して自国の名誉を弁護することであると、彼らは思い込んだ。自国を弁護するもつとも高貴な方法は、その過誤を非難し、祖国をそれから洗い浄めることであるが、彼らにはそのことが、分からなかつたのである」（「戦いを超えて」、一五ページ）。

ロマン・ロランが、ドイツの知識人たちに訴えたのは、祖国の権利よりも人間精神の権利の方が上位にあることを自覚した、「たった一つの自由の声」（「Pro Aviz」、一五ページ）を発することであつた。しかし、彼らからは、「いかなる声も発せられなかつた。獣の群れの喧騒、狩人に放たれて、足跡に吠え立てるインテリ獵犬の群れ、その罪を認めようとは少しもせず、異口同音に罪悪など

はまったくないと宣言した、その横柄な答弁しか私は聞かされなかつた」（同上書、一五一—一六ページ）。

ドイツの知識人たちが、「戦争は戦争である」、「ドイツはドイツである」、「必要は法を無視する」、「ドイツはドイツの色彩で世界を染め上げればよい」という思想に取りつかれていた（同、一七ページ）と非難するロマン・ロランは、それまでもつとも人間のヒューマニズムを重視してきたはずのキリスト教徒と社会主義者たちが、戦争突入に際し、もつとも弱点を示した勢力であつたことに憤りを隠さない。彼らは突如にしてもつとも熱烈な国家主義者になつた。ドイツの社会主義者たちはかなり教条主義的な思想を保持していた。にもかかわらず、彼らは帝国議会の戦時予算を支持し、プロイセン内閣の命令に服し、武器を取って進軍することを誓つた（同、二六ページ）。各国が自分の神をもち、自分の神を守つて他国の神を粉砕するのであつた。

「二万人のフランス人司祭が軍旗の下を進軍している。イエズス会修道士たちはドイツ軍に奉仕している。枢機卿たちは戦争教書を発している。ハンガリーのセルビア

人司教たちが、大セルビアの兄弟たちと闘うことを信徒に勧告するのが見られる。そして新聞は、イタリヤの社会主義者たちがピサの駅で、神学生たちが軍隊に入るのを歓呼して、みな一緒に「マルセイエーズ」を歌うという逆説的な光景を報じて、何ら驚く様子もないのである」(同、一八六ページ)。

「彼らをことごとく運び去る大旋風はそれほど激しいのだ！この大旋風が途中で出くわす人間たちは、それほど弱いのだ！私も、他の人々と同じように！。さあ、落ち着きを取り戻そうではないか！」(同、一八六ページ)。

もっとも危険なのは、プロイセン帝国主義であり、それは軍人封建階級の表現である。それはドイツ人自身に對しても災禍である。

「まず減ほすべきはこの帝国主義である。ツアーリズムが次の番であろう。各民族には、多かれ少なかれ、帝国主義がある。その形態がどうであろうとも、……(略)……それはヨーロッパのもっともよい血を吸う蛸である」(同、一八八ページ)。

「私は自分の周囲で友なるスイスが震えおののくのを

見る。スイスの心は、異なる諸人種に対する同情に分割され、自由にそのいずれをも選ぶことも、それを表明することもできないのを嘆いている。私にはその悩みが分かる。しかしそれはよいことである。そして私はスイスがそこから諸人種間の調和という高尚な喜びに達することを希望する。それはヨーロッパの他の国々にとつて、高貴な模範となるであろう。スイスは嵐の中に正義と平和の島として聳え立ち、あたかも中世初期の大修道院のように、荒れ狂う暴力に對して、精神が安息の場所を得、すべての国の泳ぎ疲れた人々、憎悪を厭い、憎悪を目標し、その被害を受けたにもかかわらず、すべての人を兄弟として愛することをやめないすべての人々が、寄りきたるところとなるべきである」(同上書、三二一ページ)。

ロマン・ロランこそは、黙示録の青ざめた馬を直視しつつ、それに耐えて人間の心の中のもっとも美しいものの、したたかな生き残りを見ようとした、執拗で豊かな人であった。この賛辞でもつて私の報告を終えたい。

(京都大学経済学部教授)

## ロマン・ロランと魯迅

區 建 英

ロマン・ロラン（二八六六一—一九四四）も魯迅（一八八一—一九三六）も、十九世紀末から二〇世紀初めにまたがる時代を生きた人物である。同時代とはいっても、当時、ロランの祖国・フランスと魯迅の祖国・中国はそれぞれ、文化的背景も国の事情も非常に違っていた。フランスは早くも十八世紀の啓蒙時代に多数の優れた思想家を輩出し、近代的な意識革命の先端をリードした国であり、これに対し、中国は数千年の伝統的な文明と秩序を固持しながら、西欧文明の衝撃を前にしてその伝統文化が崩壊しはじめた国であった。また、フランスはアンシャン・レژیーム（旧制度）に対する大革命も平民のレベルまで浸透して行われ、さらに産業革命の洗礼を受けた近代国家であり、これに対し、中国は腐り果てた封建

体制が頑固に存続した中で、欧米列強に侵略され抑圧され、半封建・半植民地の境地に陥った国であった。このように違った両国の歴史背景と文化空間に二つの異なった文学の形象が生まれてきた。

ロマン・ロランは数多くの戯曲や英傑の伝記、また『ジャン・クリストフ』、『魅せられたる魂』などの小説を書いたが、これらの作品に描かれた主要人物は、基本的に社会の進歩に対する深い信仰を持ち、あえて卑俗の世界に反抗し、自分の天職を果たすために不屈な精神をもって戦うような英雄、しかしその多くは苦しい戦いの果てに敗北する悲劇的な英雄であった。これと対照的に、魯迅が書いた作品の多くは主として、社会の暗黒を暴露するものであり、そこに登場する主要人物は基本的には、

無知、愚鈍、卑屈、狡猾などの悪徳を持つ醜悪な人間である。しかも魯迅はこのような奴隷の悲劇を描写する場合、暗黒の外に立つ輝かしい英雄としてではなく、自分も暗黒の中にいる一人として、同じ運命に置かれた人々に空気を日光を自ら獲得せよと叫んだのである。

悲劇の英雄を創造したロランの作品は、善良で情熱的で勇猛な精神に満ちあふれた輝かしい人間像をもって、読者の心に感動を与えるものであった。悲劇の奴隷を描いた魯迅の作品は、激しい嫌悪に満ちた辛辣な悪罵によって吐き気を催させるほどの醜悪な人間像を描き出し、読者の心に衝撃を与え人を猛省させるものであった。このきわめて違つた二つの文学形象は、図らずも共通する思想的主題を表している。

十九世紀末の西欧社会は、卑小な物質主義と利己主義に陥り、かつて啓蒙時代や革命時代に見られた人間の偉大な精神や気高い品格が死滅したようになり、個人の自由と良心は、理性の欠けた大衆感情の波に呑み込まれ、社会の英知は全体主義的な「民主」によって埋没させられていた。また、偏狭な民族感情と人間相互の憎悪に駆

り立てられ、世界は残酷な争いや殺伐が繰り返された。

この時代はロランの目にどう映つたのであろうか。「ペートーヴェンの生涯」で、彼は次のように述べている。

「空気は我らの周りに重い。古い西欧は、毒された重苦しい雰囲気の中で麻痺する。偉大さの無い物質主義が人々の考えにのしかかり、諸政府と諸個人との行為を束縛する。世界が、その分別臭くてさもししい利己主義に陥つて窒息して死にかかつている。世界の息がつかまる」

〔ペートーヴェンの生涯〕岩波文庫一九九六年一五頁。

こんな時代だからこそ、死滅に瀕している人間の精神を生き返らせるために勇気を奮つて戦う英雄が必要とされた。「もう一度窓を開けよう。広い大気を流れ込ませよ。英雄たちの息吹を吸おうではないか」（同前掲書）。これはまさしく、ロランが見定めた自分の使命であった。

ロランに近い過去また彼の時代には、英傑たちが存在していた。彼はこれら英傑の苦しみに満ちた戦いの生涯を描くことによつて、同胞や人類とともに、偉大な精神の息吹を吸おうとした。さらに、彼はみずから現代の英傑を創造しようとした。それは「ジャン・クリストフ」、

「魅せられたる魂」などの小説に結実している。「ジャン・クリストフ」の序文で、ロランはこの意図を次のように表している。「私が『ジャン・クリストフ』によって引き受けた義務は、フランスの精神的な、また社会的な崩壊の時代に、灰の下に眠っていた魂の火を再び目覚ますことであつた。」（『ジャン・クリストフ』への序）

【ロマン・ロラン全集】一、みすず書房、昭和三四年、四頁）。

ロランが創造した小説の主人公およびそれと関わる多くの人物の群像は、時代の矛盾と人間の精神状態を典型化したものである。その小説に見られる特徴の一つは、人物の内面的な精神活動を通じて時代と社会の様相を反映することである。その主要人物の典型的な性格は所与の社会環境に依存するのではなく、そうした環境とぶつかる中で表現されたのである。つまり、彼が描いた人物の精神は、単に環境に追隨して変化するものではなく、主体的に環境に取り組む、という特色をもっている。たとえば、ロランはジャン・クリストフを西欧近代文明の矛盾の渦中に置き、各階層の人物と交えさせ、様々な重

大事件に接触させ、各種の時代的な難問に直面させた。その中において、クリストフの反抗の精神、超人の奮闘精神を描いた。クリストフは偏狭、卑俗、虚栄的な雰囲気包み込まれた社会にしながら、その包圍を打ち破つて精神的に超越し、芸術の眞実性・純潔性を追求し守り続けた。ロランはまたクリストフを通じて、一切の偶像や權威にあえて挑戦し、腐敗的な社会現象や、虚偽、低級、卑俗な精神や文化現象を大胆に否定する、というような批判精神を表現した。

ロランが創造した現代の英傑ジャン・クリストフは、ロラン自身でもある。ロランは社会の進歩と民族間の平和を希求するために、あえて同胞の大勢に逆らつて、堂々と文明批評を展開した。第一次大戦が始まつた頃、彼は「戦いを超えて」という戦争批判を取って公表し、このため民族感情からの罵声を浴びせられ、親戚や知人の離反と排斥を受けた。こうして、孤立の立場に置かれたロランの苦しみは深刻なものであつたろうが、しかし彼にとつて、何よりも恐れるのは独立精神の死滅である。戦争中、彼はさらに「万人に抵抗する一人」という題の



文学作品を書き、群衆の魂の深淵に個人の魂が呑み込まれる危険な事態を暴き、また、一九一九年に「精神独立宣言」を発表して、組織に拘束されず大衆感情の虜にならず、自分の良心を堅持し自分の使命を果たすよう、知識人に訴えた。それらの論説や作品には何れも個人に自由と精神の独立を守るといふ思想的主題が貫かれている。

魯迅の場合、彼が文学に関心を寄せるようになったきっかけは、中国の滅亡に対する危機感であった。封建的な因襲と対決し、中国を被植民地化の深刻な危機から救おうとする彼の志は終始その文学活動に貫かれている。いうまでもなく、魯迅は批判の鋒先を帝國主義列強の侵略に向け、清朝の暴虐な封建支配に向けた。しかしそれ以上に、彼は抑圧される立場に置かれた中国の民衆を批判の対象とした。このような姿勢を取った理由は主として次の二点が考えられる。その一つは、中国の運命逆転の契機を民族自身の内部に、社会変革と民族独立を担う主体は被抑圧の中国民衆にしか求められないという考え方による。もう一つは、長期にわたって奴隷のように抑

圧されてきた民衆は主体性が欠けており、しかもなかなか目覚めなかった、という事態に対する痛切な認識による。

一九〇二年、魯迅は日本に留学し医学を志した。ところが、医学専門学校の教室で、彼は衝撃的な幻灯を見た。それは、ロシアのスパイとして処刑される中国人とそれを取り囲んで見物している大勢の中国人の写真であった。中国の民衆が無知蒙昧で惨めな運命に置かれても意識しないという有り様を、彼は痛感した。「およそ、愚弱な国民は、たとえ体格がどんなに健全で、どんなに長生きしようとも、せいぜい何の意味もない見せしめの材料とその観客になるだけである」(『呐喊』自序)「魯迅全集」第一卷四一七頁、人民文学出版社、一九八七年)。魯迅はそうした国民の肉体を救うより彼らの精神を変えようが急務だと考え、これがきっかけで医学をやめ、文学を志した。

魯迅は中国の社会変革を「国民性の改造」という精神革命の過程として考え、その指導者役を、国民の奴隷根性を駆除し中国を独立へ導いていく詩人としての英雄、

「精神界の戰士」に託し、文芸運動を提唱した。魯迅が求めようとした「精神界の戰士」は、強靱な主体的な精神を持ち万難を排してひたすら向上するような人物である。「今日、待望されるのは、衆人の騒がしい議論に同調することなく、独立した自己の見識を持して立つ人物の現れることである。彼らは世間の眞実を深く洞察し、敢えて文明を批評する。惑えるものと是非を同じくすることなく、ひたすら己の信ずるところに向かつて進んでいく。世を挙げて称賛されようとも喜ばず、世を挙げて非難されようとも挫けない。……人おのおのが自己を持ち、時流になびくことがなくなれば、中国もまたこれによつて存立を全うすることができるのである。」と彼は述べた。〔破惡声論〕【魯迅全集】第八卷、二三五頁〕。

しかし、魯迅が直面したのは苦惱と困難に満ちた曲折の道であった。当時の中国の現実には、彼が近代西欧から見出したような英雄がまったく見つからず、近代的な人間観に基づいて現実性を備えた中国人像を置き去ることは不可能であった。辛亥革命は底辺の民衆を置き去りにし、奴隸根性に浸かっている民衆を目覚めさせるこ

とが出来なかつた。深刻な絶望が募っていく中で、彼は逆に暗黒暴露の手法をもつて民衆の主体性を呼び覚ますような、苦痛の道程を辿らなければならなかつたのである。

「呐喊」自序」で、彼は無知鈍感な中国國民を、「窓もない鉄の部屋に熟睡する人々」になぞらえてこう述べた。「例えば、一軒の鉄で創られた部屋がある。それは窓がなく、しかも頑丈で破りにくいものである。その中に多くの人が熟睡している。彼らはまもなく窒息して死んでしまう。むろん、昏睡の状態から死滅に入るのだから、死の悲哀も感じないだろう。しかし、もし今、あたは大声で叫び、いくぶん意識のある数人を起こし、これら少数の不幸な者に自分もはや救われたいということを知らせ、臨死の苦しみを受けさせれば、これは彼らに対する思いやりなのだろうか。……しかしこの数人は起こされて目が覚めた以上、鉄の部屋を壊す希望がないとはいえないだろう」〔呐喊〕自序」前掲書四一九頁〕。

魯迅は暗黒の中に昏睡している人々を起こし、彼らに自分の悲惨な運命を知らせようとした。「狂人日記」や

「阿Q正伝」などの小説は民衆の病態的な精神を典型化し、中国人の覚醒を促そうとした苦心作であった。

「狂人日記」は醒めた狂人の目を借りて、「仁義道德」で飾られた歴史に潜んでいる「食人」(人間が人間を食う)という残忍な実質を容赦なく抉り出した作品である。狂人が見た村人の目つきは「人を食いたがりながら、他人から食われることを恐がって、互いに疑心に満ちた目つき」であった。狂人は村人の臆病を見て、大声を出して笑ってやったが、「私は勇気があるので、彼らは……ますます私を食おうと思うのだ」と狂人は言った(「狂人日記」【魯迅全集】第一巻、四二六頁)。このように、魯迅は「食人」という社会の実質を暴くと同時に、「食人」の実質を外れた人はまず食われてしまうという、人間の主体性を抹殺する事実を指摘した。「阿Q正伝」は中国人の国民性の典型として阿Qの奴隸根性を冷酷に描きだした作品である。無知、魯鈍、狡猾などの悪徳を一身に集めた阿Qという人物の描写には、奴隸的な民衆の俗物性に対する魯迅の強い嫌悪が滲み出ている。しかし、阿Qの醜悪さと悲惨な運命についての手厳しい描写に

は、中国民衆に対する魯迅の深い愛と責任感が溢れている。

以上から分かるように、ロランと魯迅の文学は正反対の個性を表している。光で人を照らし英雄の息吹を社会に吹き込もうとしたロランと、暗黒の暴露によって人を猛省させようとした魯迅、しかしこれほど違った文学の道歩んだ二人は、ともに人間の独立精神という普遍的な価値につきつめた。魯迅にとつて、ロランは偉大な「精神界の戦士」であり、彼が指導した雑誌「原莽」はロマン・ロランについての記事や作品の翻訳を多く載せた。ロランも魯迅の作品に共感を持ち、好意を伝えようとした。しかし残念ながら、互いに尊敬していた二人の文学巨人はいろいろなすれ違いによって、直接出会う機会がなかった。

ロマン・ロランは、中国において最も尊敬される西欧文学者の一人である。ロランに対する中国知識人の尊敬は、ロランと同時代のフランスの彼に対する尊敬をはるかに上回るとさえいえる。二〇世紀前半において、「五・四新文化運動」から生まれた世代の知識人はロラ

ンを深く景仰した。ロランの作品は彼らの人生の苦悩の慰め、光明を求めするための灯台、奮闘の途上の恩師とよい友達になっていた。中華人民共和国が成立した後、反右派闘争や文化大革命という異常な時期を除いて、ロランは中国の知識人に尊敬され続けた。一九八〇年傳言訊「ジャン・クリストフ」が再度発行されたとき、この名著は大学生や知識人に広く愛読された。一九八九年頃の全国重点大学に対する調査によると、「ジャン・クリストフ」の貸出率はずっと第一位であった。人の精神を窒息させる文化大革命時代をくぐり抜けた知識青年、自分の思考を停止して国家イデオロギーに任せた自身の過ちに気がついた若者たちは、ロマン・ロランを熱烈に憧れた。

ところが、開放改革が十数年行われ、経済の繁栄を見せ始めている今、中国は理想を冷笑し、実利を大義名分として掲げる時代となり、ロランを読む人はだいぶ少なくなっている。人々の話題は金儲けの方に集中し、ロランの小説を熱く議論する青年学生があまり見られなくなった。かつて十九世紀末のフランスに見られたような、

精神の頹廢と政治の墮落は、二〇世紀末の物質文明へ走っていく中国にも現れてきた。もちろん、ロランを尊敬し続ける知識人は少数ながらいる。ロランの研究者も僅かながら、依然として真剣にロランを研究している。彼らは文革の動乱時代でロランにかかっていたイデオロギーの深い霧を追い払ってロランを再評価し、そこから愛と理想、奮闘と創造という普遍的な精神を導き出そうとする。また、ロランと中国伝統文化との親近性についての研究も現れた。中国文化の根底からロランとのつながりを探る。この研究には、ロランが永遠に中国人に親しまれていくという痛切な期待が込められているのである。

(新潟国際情報大学助教)

## ロマン・ロランとの出会いから

—なぜ、わたしは博士論文にロランを選んだのか—

鄭承姫

李珣  
濱田陽 訳

### 1

初めてロマン・ロランの作品に出会ったのは一九八一年頃でした。私はフランスのグルノーブルに到着し、様々な授業を受けながら博士学位論文の作家を選ばなければなりませんでした。そのとき、偶然「ジャン・クリストフ」の最初の数ページを読み、単純ながら感動的な文体の文章と考えました。既に、ソウルで仏文学を六年間学んでいましたが、大した知識をもっていたとはいえません。仏文学に対する強烈な情熱をもつ一方、何故かそこから望んでいることを探せないという思いにとらわれていました。しかしロランの文章が私の文学的

渴望を解消してくれたのです。力があり、単純な文の羅列でなくて生命の熱気が感じられる文章、これがその時「ジャン・クリストフ」の最初のページから感じたことでした。結局この考えが、その年の秋、パリのソルボンヌ大学に移ってジャック・ロビシエ教授に会い「ロマン・ロランを私の博士学位論文主題として扱いたい」と話す契機になったのです。

しかし、実際に論文の具体的テーマ「ロマン・ロランの小説にあらわれる相反する要素の結合」を提案された方は、私の指導教授ロビシエ先生でした。その後四年間、ロラン作品と彼に対する批評書を読むのにも充分でない期間でしたが、突然私はソウルに戻らなければならない

事情ができ、論文執筆を始めるにいたらずフランスを離れることになりました。ソウルで四・五年フランス語と仏文学を大学とアリアンス・フランセーズで教えた後、一九九〇年パリに戻りました。すでに恩師ロビシエ教授は引退し、その方の推薦で、弟子の現在ロランの最高権威、プレストのブルターニュ・オクシダントル大学教授ベルナル・デュシャトレ先生を訪問しました。そして氏の指導の下で一九九五年初め博士学位論文審査に合格しました。ソウルで過ごした数年を除いても論文を準備するのに約八年あまりの年月がかかったことになりました。

## 2

まず、ロランの日本と韓国での認知度について私が知っている限りで申し上げます。

フランスで学んだとき、ロマン・ロラン友の会が出している会報を読み、日本では彼の小説、伝記、書簡―日記全集など相当量がそれも何版も翻訳されている事実を知って驚きました。一九九四年秋、ロランの故郷である

ブルゴーニュのクラムシーで没後五〇周年記念講演と音楽会が三日にかけて開かれましたが、席上、ロランの専門家間で遠い東洋の国日本においてロマン・ロランの熱気がとても熱いということが話題になっていました。

また、私の調査によれば一九九五年初頭までにフランスの大学でロランを主題とした博士学位論文が三〇編余り出て、その中に日本人が一人います。中村要氏です。彼は、一九九二年パリ第七大学で「ロマン・ロランにおける芸術創造」のタイトルで論文を書き、私自身興味をもってそれを読んだ記憶があります。

さらに、欠かすことのできないのが京都のロマン・ロラン研究所であり、おそらく日本ではロランを研究し一般に普及させるのに少なくない貢献をしているのではと思われま

一方、残念なことに韓国では今までロランはそれほど広く読まれている作家ではありません。翻訳は今だに活発ではなく、おそらくそれが一番大きな障害だと思われます。「ジャン・クリストフ」と「ペーターヴェンの生涯」が、ロランを知らせるのに一番貢献をしていると言

えるでしょう。その他に「魅せられたる魂」、「コラ・ブリュニオン」、書簡集「ロマン・ロランとヘルマン・ヘッセ」程度が翻訳されています。ですから翻訳に関しては、既に終わつた作業よりはこれからしなくてはならない作業の方が多いのです。一方、韓国人としてフランスでロランをテーマに博士学位を取つた人は九五年初めまでで三人程度です。

### 3

それでは、私の論文テーマの内容について簡単にみていくことにします。

ロランにとつて“一人の中に多種類の人が存在している”という考えは一種の強迫観念のようにつきまとつてくる命題でした。「魅せられたる魂」にはロランのこのような考えがよく現われています。

「矛盾した心の要求の謎を解かなければならなかつた。そしてマルクの魂の中で対立するこれらの掟から、それらをも包含する一層広大な掟をほとぼり出させることだつた。」

ロランはマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークに宛てた一八九二年三月一三日の書簡で次のように話しました。

「私は一人の「人間」であることを欲します。私は人間の資質のいづれをも断ちたくありません。人間の富のどれもとれないために貧しくなりたくありません。私は理想主義者で、物質主義者で、青春主義者で、官能主義者で、汎神論者で、懷疑主義者で、キリスト教徒で、異端者でありたいとおもいます。それらのすべてでありながら私であることを欲します。」

このときロランは二六才でした。私たちはこの手紙を読みながら、一人の若者、芸術家として彼の夢がどんなに大きな次元のものだつたか推してはかることができま

す。また、ロランは「内面の旅路」で相反する要素から引き出した調和に対する自分の見解を次のように説明します。

「一つの生きた思想というものは一つ以上の次元を持つものであり、相対立するいろいろなものを包摂し、そ



して相対立し矛盾するそれらのものによって、自分（その生きている思想）のハーモニーのねり物を作るのであることをマルヴィーダはよく知っていた。」

以上で見たとおり、ロランにおいて、「一つの存在の中に入っている二つの存在」に対する意識はほとんど明白な真理に近いのです。そして、彼の内部に存在する二つの魂の間に完璧な分離がなされましたが、この分離は決別を意味するものではありません。この分離はもつとよい結合という前提の下だけに可能だからです。

ロランは「ユルム街の僧院」で次のように語ります。

「私の中に私が二人いる、私？ それはほんとうに私だろうか？ 私が何かを一番確実に願うその瞬間にも私は私の中の意思をもつ存在が神であり、私という不完全で病弱な存在の中で強い力をもって私の役割をするのは他ではないその神であることをよく知っている。」

ここでは存在の二元性に対するロランの考えは、神に対する信仰の形態で現われています。多少懐疑的でしたが、ロランは熱烈なクリスチャンに負けない神聖を持った存在があると固く信じました。

ロランはどんな形態の考え、哲学、宗教でも関心を寄せないものではありませんでした。彼の文学的関心は世界全ての国に向きました。それは、生前に出し合った膨大な量の手紙の相手たちを見てもわかります。

#### 4

次に、論文で採用した方法について申し上げます。

私自身の考えではロランの結合という概念には三種の種類があります。

まず、相反する二つの要素が一人の中で、たいした衝突なく共存することです。この場合、いろいろな観点からみて、相反する二つの要求が一人の人を両側から引っぱります。ただ、比較的やさしく引っぱるため、二つの要求の間にバランスが維持できる状態です。この段階では、行動は存在しません。

これと反対に、二つめの結合は結合の範疇には入らないと見ることもできます。なぜならここでは均衡状態は崩れ、二つの要素のなかのある一つを選択しなければならぬからです。そうしなければ、二つの要素が一緒に

崩れ、同時に破滅する可能性もあります。このとき、行動が数千回の省察をへて定着され、行動に伴うリスクも念頭に置かなければなりません。

そして、最後の結合の形態こそが真正な結合です。この結合の形態に属する登場人物達は衝突という状況を知る前に魂の平和にいたります。ある人は、「とうてい治せない」楽天主義のため、ある人は自ら勇敢にあきらめることで、ある人は純粹な隣人愛のため、ある人は賢明さから魂の平和をもつことができます。この人物たちには相反する要素が衝突せず、平和の中で、相手要素の内部に入っていくみます。

論文の第一部で私は、「ジャン・クリストフ」と「魅せられたる魂」に登場する人物たちに現われる相反する諸テーマを分析しました。ジャン・クリストフにおいては「燃える炭」の章で愛欲の試練を知るまでを扱い、アネットにおいては一人息子マルクの悲劇的な死の直前までを扱っています。この二人においては、物事を理解しようとする意志が人格を粗末にすることなく、骨身を削るような苦痛もなく、行動に対しなんらの拒否意識も

ありません。

この二つの大河小説に登場する他の知識人、つまりオリビエ・ジャン、ジャーマン・シャパンヌ、ジュリアン・ダビは消極的意味での普遍的理解心をもっているため、彼らなりに苦痛を経験しますが、ジュリアン・ダビを除いては誰も人類に対してもっている理想を実現しようとする行動の場に踏み出すことはしません。おおよそ、彼らは頭の中ですでに行動がどういうものであるかを味わい、その後、彼らの舌には行動が残した苦い味が残っています。行動してみる前に吐き気をもよおす人達と見るべきです。

論文第二部で、最初に語るべき言葉は選択です。戦争か平和か？ 革命か耐えられない現状の持続か？ 行動か中立か？

この選択の場に悲劇的な死をむかえた二人の若者ピエールとリュースの悲しい運命が扱われます。彼らは戦争の中で生き、愛し、死んでいく過程を通じて戦争がもつ醜い顔を告発します。

また、多くの批評家たちが、「魅せられたる魂」が政

治参加の文学に属し、革命を扱う本といいますが、私から見てもこのような指摘は適切と思えます。マルクはロマン・ロランのように知識人から出発し行動家になるまでの変化を、説得力をもって見せてくれます。ただ、彼は自分の若い妻の助けをもらい受け、苦しむ人類を助けるためいろいろな行動を起こしたにも拘わらず、他人に変わって死ぬ最後の場面でテロリストたちに積極的に対応しなかったことで、行動する英雄の姿を見せられませんでした。

それでは行動の場で積極的に闘争して死んだ人物は誰でしょう？ それはマルクが身代わりに死んだ人の息子シルヴィオです。彼は飛行機を操縦して勇敢にローマの空に飛び立ち、ファシスト独裁者に立ち向かう内容の宣伝物をまいては花と散っていきましました。

一番素敵な結合の形態は論文の第三部で扱いました。コラ・ブルニオンは笑える人物、健康に生きることができるとの保障のように私たちの前にあらわれます。ロランにもこれと似た状況で現われました。つまり、コラ・ブ

ルニオンは・ロランが一〇年近い忍耐の年月の末に「ジャン・クリストフ」を終えた時期に浮かんた人物で、作家は創造していく人物のユーモアと人生にたいする幸福な哲学、笑いなどで、作品を書く間「ジャン・クリストフ」という深刻なテーマから遠く離れることができたのです。

その一面、「ジャン・クリストフ」によく出るゴットフリートおじさんは謙虚さのおかげで、神、自然、人間の中にある真実を悟って心の平和を探した人です。

次に外すのに惜しい人物はグラツィア・ブオンテンピです。彼女は静かで美しい北部イタリア女性の典型で人々を愛し彼らから愛され自身の純粋で利他的愛で老いていくクリストフの魂に平和をもたらします。

第三部で分析できる他の人物としては孤高なイタリア人ブルノー・キアレツツァ伯爵がいます。彼は、一時期地上の幸福を全部味わいましたが、一晚のうちに地震のため愛する家族を失う不幸な人物として登場します。そして、その後アジアの高原をさまよひアジア思想の深い哲学を悟って、精神的な平常を取り戻します。

第三部が終わる少し前で私たちはもう一度クリストフとアンネットに会えます。クリストフは新しく来る世界にたいする希望をもっていたため、アンネットは万人の母という役割を背負ったため、二人とも前章で分析したときより成熟した人物になっています。

本論文最後には「ジャン・クリストフ」と「魅せられたる魂」によく登場する川のイメージを分析しています。これらの作品で川は人類を固く一つに結合する象徴的意味を持っているのです。

以上簡単ですが、私の論文紹介も終わりました。長い時間、至らない私の講演を聞いてくださいましたありがとうございます。ありがとうございました。

(質疑応答)

Q 大学でロマン・ロランを講義していらっしゃるのか。

A 今年の四月からソニンシン女子大で講義をしています。

仏文講義と仏文演習で、四年生に教えており、仏文

演習の方で「ジャン・クリストフ」の「反抗」の章の最初の約一〇節を扱っています。まだフランスから帰国したばかりですが、これからロマン・ロランについて学んできたことを少しでも学生達と分かち合っていきたいと希望しています。

Q 韓国でロマン・ロランを翻訳される場合、どのような年齢層の人々に読んでもらいたいですか。また、ロランのどういう作品を翻訳されたいですか。

A 翻訳が必要な作品は、たくさんあると思っています。韓国では専門家が少ないのが現状ですが、ロランの書いた文章は若い人に力を与え、年をとってからも回想できるものです。また、彼は死の直前にも書いています。ロランは全ての世代を対象に書きましたので、韓国でも全ての世代に読んでもらえるようにしたいと思います。

Q 韓国の方からロマン・ロランの話を開けたことは非常に貴重な経験でした。もし今、日本の若者と韓国の若者がロランを読み、ロランを仲立ちにして話し合えば、きっと良い結果がでるのではないでしょう

か。

A 今のお話しは、ロマン・ロランが本当に望んだことではないかと思えます。全ての人類が国籍、国境、年齢、性別等を問わず一つになって、未来と一緒に考えていくというのが彼の願いではないかと思えます。

(フランス文学者)



## 韓国から講師、

### 鄭承姫チョン・スンヒさんを迎えての覚え書

宮本 エイ子

通訳者の李珣淑嬢の「困った、困った」受話器向こうの声は、講演開始までを象徴する赤いシグナルだった。

テキストは長く、質問時間を含む二時間以内にはとうてい納まらない。ハンゲルから日本語。二倍の時間はかかる。しかも内容の三分の二は、ロマン・ロランのピオグラフィのようなものという。

速達便のテキスト入手は一週間前、講演は明後日、講師来日は明日。

共訳者で当研究所評議員の濱田君を交えて、わたしたち三人は、四〇〇字原稿用紙に換算すれば約五〇枚のワープロ訳稿を前に、試験前の一夜漬けのごとく省略箇所を選定しながら再構成、終わったのは夜中だった。しか

し、もつとも重要なことを残したまま。それは講師本人の了解をいかに得るか。

講師のチョンさんは、フランスのロマン・ロラン研究の第一人者で、没後五〇年記念の基調講演のため来日を願ったデュシャトレ教授の許で博士論文を書き、彼の勧めで、昨年その論文を当研究所へ送ってくれた方。同じアジアの女性である彼女に私はとても親近感を持っている。

李さんは京大人間・環境学研究科に在籍の留学生で、ロマン・ロランセミナーの読書会や講演会に参加しているおなじみの顔。

講演依頼の発端は「隣国、韓国におけるロマン・ロラン」というテーマに在る。日本以外のアジアにおけるロマン・ロラン受容史は、私たちに大いなる関心を引き起こす。役員会の承認を得て講演依頼状を認めてから今日に至るまで、たびたび食い違いがあったこともわたしを不安にする。

パリへ三日間で届く郵便物はソウルへは一〇日間を要するし、FAXは日本ほど一般家庭に普及していないら

しい。交信に時間を要する。肝心のテーマはといえば、「韓国には、ロマン・ロランなんか何もない」とそっけなく、彼女が昨年フランスで取った学位論文「ロマン・ロランの小説における相反する両極の要素の結合」にしてくれないかと主張されはじめたり。「こちらの条件にあわなければやめればいいんです」という理事長の意見も尊重しながら、やっと「ロマン・ロランとの出会い。――なぜわたしは博士論文にロマン・ロランを選んだか」に漕ぎつけた経緯がある。

「長くなれば聴衆の理解が半減し退屈するんです。これを守ってもらわなきゃ」との意見もある。

閑空から「はるか」で昼過ぎ京都駅に着いた彼女を出迎える。おたがい、テキストのことが気になっている。しかし、わたしは初めて来る外国のお客さんに「京都観光で、どこかみたいところがある？」と、念のため儀礼的に聞く。すると「どこもない、京都大学を見たい」と答える客人に、「あなたの宿舎を京大大会館に取ってある」と言う、彼女はどんなに喜んだか。

チエックインの時間には早すぎたが、掃除ができてい

て荷物を入れることができた。すぐさま私たちは徒歩で広い京都大学のキャンパスを横切り、研究所のある銀閣寺前まで上った。ここまで来ているのに、せめて銀閣寺だけでも見せてあげたいと思うわたしのおせっかいが余分だった。閉門三〇分前に入山して、京都を一望できる散策道にも立ったが、彼女は余り興味を示さない。

約束の時間に李さんと濱田君は研究所へ来た。昨晚話し合ったとおり、チョンさんに先ず書庫を見てもらった。彼女はロランの日本の翻訳や文献を実際に見ながら驚きの表情を隠さなかった。

私たちは和やかに卓上でんぶらでチョンさんの歓迎夕食をとった後、予定通り李さんが「テキストが長すぎる」と口火を切った。

「このテキストでこの間、韓国で話したが一時間で終わったわ、通訳付きでも二時間で丁度」とチョンさん。

「質問を受ける時間もその中にほしいの」とわたし。結局、私たちはどこを割愛するかになると一層白熱した。

「だから私は自分の論文を話すと言ったんです。あな



たは対象は一般だと言ったでしょう、それでガイド的にしたんです」とチョンさんは応戦した。

「学者や専門家向けではありませんが、一般の人でもロランのことを相当知っている人や、愛読者ですから、ロラン夫人もかつておっしゃっていました。日本人は世界のどの国の人にもましてロランを知っているとね、時間内に納まらなくて、聴衆はうずうずするより、活発な質疑応答のほうが満足するでしょう」

彼女は、はじめは怒りをあらわにしていたが、「私は議論が好きだから、納得すればいいのよ。よくわかったわ」と笑顔がこぼれてきた。

韓国人の李さんは講演会の事情にも精通していたので、彼女のお蔭で円滑に議論ができた。

「今は、日本でもロマン・ロランも読まれないけど、明治四四年から、翻訳されていて大正時代多くの文学者や青年に影響を与えたんです。韓国はどうなのかしら、同じアジアの韓国では、どんな状況なのか、そういうことを知りたいの」

「韓国にはなにもないわ、だってそうでしょう、日本

が来て、私たちの自然も建物も文化的風土もすべて破壊したんですよ」

彼女のこのひとことでわたしは言葉を失った。

日本帝国主義による植民地では、いかなる人も被抑圧者であった。自由という言葉の存在しない弾圧された民族である。知的左翼思想や理想主義的ヒューマニズムの萌芽の温床は韓国の土壌には余地がなかったとみるべきなのだ。

日本の敗戦によって三〇数年の植民地から解放。初代大統領就任の一九四八年から一九九三年まで続いた軍事政権。北と南の切断された状況が今なお続いているではないか。この特殊事情を含む歴史を識ろうとしなかった隣国への無関心、他人が受けた痛みへの思いやりのなさをわたしは深く反省している。

講演会（要旨掲載）は新鮮な雰囲気と誠実な話しにつづき活発な質問を受けて、壇上と聴衆が一体となった。韓国におけるロマン・ロランのシルエットの裸像を身近かに垣間見ることができ、韓国の未来のロラン像に希望

を託しえる実感も得て、主催者側としては満足した。  
チョンさんありがとう。ロマン・ロランを話すために  
また会いましょう。

(ロマン・ロラン研究所・理事)

### 韓国でのロマン・ロランの紹介・翻訳

【民衆芸術論】金億沢、雑誌「開闢」二六〇、二九号、

一九二二年八月〜十一月、四回

論評「アンリ・バルビュスとの論争」金基鎮訳、雑誌

【開闢】三九〇、四一〇号（訳者はバルビュス支持、影響を  
受ける）一九二三年九月〜十一月

――反戦文学運動「クラルテ」の日本と朝鮮での展開――

立命館大学国際平和ミュージアム刊

――早稲田大学語学教育研究所教授 大村益夫氏――

【ジャン・クリストフ】編集部訳 東国文化社、一九五八年  
【ガンジー】Kimyongyo訳 新韓出版社、一九八〇年

以上二点、いずれも児童文学の類に入っていますから、  
リライト、または抄訳されたものと思われれます。その他、  
「世界文学全集」の類に入っている可能性もあります。  
韓国世界文学文献書誌目録総覧」には私が上で紹介した  
【民衆芸術論】は拾ってありませんから「総覧」もあま  
り信用できません。総覧にないからといって、ほかにロ  
ランの紹介、翻訳がないとは断言できません。確かに本  
格的な紹介は少ないようです。

以上、大村益夫氏の手紙から

## ベートーヴェンの二つのソナタ — ロランとアドルノ —

— ロマン・ロラン生誕一三〇年記念コンサートで —

岡田 暁 生

私はお定まりのベートーヴェン賛歌やロラン賛美をするつもりはありません。むしろここでは、ロランのベートーヴェン観について幾つか批判的なコメントをしてみようと思っております。そして話の落しどころとして次のような結論を考えております。つまり「本日演奏されるベートーヴェンの二つのソナタは、ロランがあまり分かっていなかった作品である」という結論であります。

さて、言うまでもなく、ロマン・ロランは熱狂的なベートーヴェン信者でありました。彼は小説や劇の執筆の傍らで、無数のベートーヴェン研究書を残し、また暇さえあればピアノの前に座ってベートーヴェンのピアノ・ソナタを弾いていた。彼にとつてはベートーヴェンを弾

くということとは、日々の神への祈りのようなものでした。そして少なくとも一昔前までは、彼の書いたベートーヴェンの伝記は、若いクラシック音楽ファンにとつて必読の書でありました。ベートーヴェンのピアノ・ソナタを練習する女学生は必ず先生からロランの書いたベートーヴェン伝記を読むように言われたものですし、また男の場合は「ジャン・クリストフ」に熱狂し、ロランのベートーヴェン伝を読み、そしてクラシック喫茶でフルトヴェングラーの演奏するベートーヴェンの交響曲を聴きながら感涙にむせぶというのが若いインテリ層のクラシック・ファンの一つのパターンだったように思います。

もちろんロランがベートーヴェンに捧げた途方もない

情熱には、ただただ頭が下がる他ありません。にも拘らず私は、大学で教えておりまして、一体今の若者（新人類と呼ばれるポスト・モダンの時代の若い人）がロランのベートーヴェン伝を読んで、果たしてこれに感激できるだろうかという疑念を払拭できない。例えばロランの書いたリヒャルト・シュトラウスについてのエッセイは、今読んでも非常に面白いものです。うがった複眼的な見方、辛辣なユーモア、鋭い観察眼の点で実に冴えている。ロランはこういう文章も書ける人だった。しかし評判の高いベートーヴェン論は、どこかオーバーな熱狂と理想主義が空回りしている印象を与えて、鼻白む時があります。

今回ここで話をするにあたりまして、ロランの書いたベートーヴェン論にもう一度すべて目を通してみて、この印象がどこから来るのか考え直してみました。そして気がつきましたのは、ロランがベートーヴェンを語る時の語彙が実は（一見恐ろしく情熱的で冗舌なようにみえて）非常に限られているということでした。ベートーヴェンを形容するためにロランが使う常套句を並べてみ

ます。まず第一のカテゴリ。これは「苦惱」「絶望」「嵐」「運命との戦い」といった言葉です。次に第二のカテゴリとしては「祈り」「平和」「光」「真実」といった言葉があります。そして第三のカテゴリに含まれるのは「歓喜」「勝利」「苦しみからの解放」「自由と愛」などの単語です。要するにロランがベートーヴェンを語る時、すべてが「苦惱から勝利に至る」とか「絶望を突き抜けて光に至る」というパターンになってしまうわけです。

もちろんロランのこうしたベートーヴェン理解の図式が「ハマル」作品もあります。それは「英雄交響曲」であり、「運命交響曲」であり、「第九交響曲」であり、「熱情ソナタ」であって、これらはいずれもロランがとりわけ大好きだった作品（主に中期の作品）です。そして逆に、ロランのベートーヴェン解釈が、最大の欠点を露呈するのがベートーヴェン晩年の作品（ピアノ・ソナタやバガテルやディアベリ変奏曲や弦楽四重奏）においてであります。

これは断言してよいと思いますが、ベートーヴェンの

晩年作品の多くは、ロラン的な「苦悩を乗り越えて希望へ」式の図式（単純な理想主義というか勸善懲惡的な図式）では絶対に割り切れないものです。へ第九交響曲）やへハンマークラヴィーア・ソナタ）を例外として、晩年のベートーヴェンの作品は概して、絵に書いたように勝利や希望や光へ向かっていくわけではありません。ベートーヴェンの晩年作品の多くを特徴づけるのはむしろ、矛盾であり謎であり、ほとんど分裂症的と言いたくなるほどの音楽の流れの飛躍であり、支離滅裂ぶりであります。例えば最後のピアノ・ソナタ第三番の第一章では、音楽は急に前へ前進したかと思うと、突然また立ち止まって、謎めいた空白が訪れるという具合で、音楽の流れがひどくギクシャクしている。またバガテルやディアベリ変奏曲は、神の声が聞こえてくるような瞬間があるかと思うと、次には俗悪な馬鹿笑いがやってくるという調子です。

このベートーヴェンの晩年作品の特徴を、ドイツの哲学者アドルノは見事な言葉で表現しております。「客観的なのはひび割れた風景であり、主観的なのはそれのみ

がこの風景を燃え立たせる光なのだ。彼は両者の調和ある統合を計ろうとはしない。」（ベートーヴェンの晩年作品はまるでひび割れた光景のように矛盾に満ちている。しかし客観的に見れば矛盾だらけのこの音楽に、ベートーヴェンはなお、燃え立つような光によって主観的な統一を与えるのだ。）そしてアドルノは彼のベートーヴェン論を、「芸術の歴史において、晩年の作品は破局なのである。」という言葉で締めくくっております。

アドルノのベートーヴェン論の、こうしたひとひねりもふたひねりもしたうがった視点は、ロマン・ロランには無縁のものでありました。ロランのベートーヴェン解釈は、良くも悪くも、もつと無邪気で単純素朴なものであります。一つだけ例を挙げましょう。ベートーヴェンの晩年の弦楽四重奏第十二番（作品一二七）の第二楽章です。この約十五分かかる長大なアダージョは、まさに「天から響いてくる神の声」とでも形容する他ない音楽、祈りの音楽です。ところがこの第二楽章に続く第三楽章は、何とも陽気な農民の踊りのようなスケルツォであります。そして先ほども申しましたように、こうした矛盾

と断絶こそが、アドルノが「ひび割れた風景」と呼んだところのベートーヴェン晩年の作品の特徴に他なりません。

ところがロマン・ロランは、こうした「ひび割れた風景」にはまったく目を向けようとしません。彼はあの夢のような第二楽章を、さんざん言葉を尽くして絶賛いたします。いわく「音楽の神殿の一つ」「大いなる瞑想の世界」「感謝と謙譲の気持ちでもって自己を捧げ尽くす、最も優しい、最も信頼に満ちた祈り」「魔術的なアダージョの法悦と清らかな至福に満ちた花園」というわけです（何と八頁！）。ところがそれに続くあの陽気な第三楽章について彼は、「あの素晴らしい第二楽章にこの第三楽章が続くのは乱暴である」「この楽章はない方がよかった」という素っ気ない言葉で片付けているのであります。乱暴なのはそれこそロランの方ではありませんまいか？ 神聖な第二楽章のアダージョに、俗っぽい第三楽章のスケルツォが唐突に続く。アドルノであれば恐らく、この矛盾の中にこそ、ベートーヴェンの現代性を読み取ったことだろうと思われれます。それは例えばマーラーの

音楽に通じるような、二〇世紀音楽に特有の分裂性の先取りです。しかしロランの手にかかると、このような分裂矛盾さえもが、ややもすると「苦悩からの解放」といった予定調和の物語に仕立て上げられてしまうのであります。

では以上のことを踏まえたくて、本日の演奏曲目について簡単な注釈をしておこうと思います。まず（順序が演奏の順とは逆になりますが）第二番ヘワルトシュエタインは、肩の力を抜いた時のベートーヴェン、朗らかなになった時のベートーヴェンの見本のような作品です。要するに（運命）や（第九）で馴染みの、演説調であるとか、握りこぶしを振り回したり、絶望して頭をかきむしったりするジェスチャーをしない時のベートーヴェンの代表と言えましょうか。あるいはフランス的なベートーヴェンと言ってもよいかもしれません。ただし、解説にも書きましたように、ロランにはこうした明朗快活なベートーヴェンは物足りなかつたようです。

次に第二八番のソナタですが、弾き手にとっても聴き

手にとっても、これは非常に難しい作品です。まず技術的にはこれは、ひよっとするとベートーヴェンのソナタの中で一番難しいかもしれない。例えばホロヴィッツがライヴで弾いた録音がありますが、あのホロヴィッツがミスタッチだらけになっていることから、この曲の難しさが分かるかと思えます。また内容的にもこの作品は非常に難解です。解説にも書きましたが、これはいわば分裂症的な作品でありまして、ともかく音楽の気分が非常に急激に変化するので、それについていくのは並大抵なことではない。そしてロランもまたこの作品の分裂気質的な気分の変化についていくことが出来なかつたようです。本日はこの謎めいた作品から、北住さんがどのような解釈を引き出されるのか、私は大変楽しみにしております。

(神戸大学助教授)



## 「ロラン生誕一三〇年 記念コンサート」に

井 土 真 杉

久しくロランにも「研究所」の催しにもご無沙汰していた私であったが、十月にいただいた会からの案内状にはことのほか心を動かされた。ロマン・ロラン生誕一三〇

〇年記念コンサート、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ二曲、そして演奏がなんと北住淳さんと来ている。寄席の三題噺めくが、この三つがそろうとあつては、これは何をおいても京都へ行かずばなるまいと早々に心を決めた。そのうえ岡田暁生さんの「おはなし」もあるという。このかたについては詳しくは存じ上げないが、一、三年前から「ユニテ」紙上に登場され、まことに興味深い音楽評論を書いておられる。ひよっとすると「おはなし」を聞くだけでなく、直接言葉を交わすような機会に恵ま

れるかも知れない。

こうして出かけた記念コンサートとそれに続く懇親会は、予期した以上に感動的で、私にとっては近ごろになく心満たされた時間となったのである。

ロランも、その「ジャン・クリストフ」も巨大な建造物に似て中身は膨大で多岐、したがってそこへの入り口もたくさんある。高校一年生の私がクリストフに近づいたのは、音楽、わけでもベートーヴェンという通路を通じてであった。

中学時代、田舎の野球少年だった私が同時に「ベートーヴェン少年」にもなったのは、一人の音楽教師の導きによるもの。野球部の練習が突然の雷雨で中止になったある日のこと、ぶらぶらしている私を彼は、注文してあった備品の「電蓄」（むろん七八回転の）がきょう入荷したから聴かせてやろうと、宿直室に招じてくれた。そこで私は、これまでに聞いたことのない音量で鳴り響くトスカニーニ指揮の「運命」交響曲を聴く。一年後、初めて生の演奏で「エロイカ」を聴いたときもそうだった



が、音楽というものが、ただ美しい、快いといっただけの存在ではなく、奔流のように体におち当たり、侵入してきて、身も心も激しく揺すぶられ流されるという実感を初めて味わったのである。「これが音楽だ、これ以外は偉大な音楽ではない!」。そして音楽室の壁にいつも貼られていた〈Durch Leiden Freudel〉という言葉の意味も自分流に解釈して感動し、いよいよ私のベートーヴェン熱病は深刻になっていく。

こんな少年が間もなくクリストフに出会い、さらにその虜になっていったのは、まことに自然な成り行きであった。そのころの私の「ジャン・クリストフ」への傾倒ぶりは、いま思えば、興味とか敬意とかを超えた一種の信仰のようなもので、經典のようにそのすべてを受け入れようと懸命だったが、とりわけ問題意識の強かった音楽の分野に関しては百パーセント彼に従おうとしていた。クリストフがブラームスを唾棄すれば、わけもわからずブラームスを憎み、また私の周辺でベートーヴェンを他の「偉大でない」音楽家と同列に論じたり、同時に演奏したりすることがあれば、怒り狂ったりしたものだ。

さすがにこうした精神状況は長くは続かず、成長にしたがって、より冷静に少しは深く読み返せるようになったが、還暦を過ぎたいまでも「ジャン・クリストフ」に盛られているロランの音楽上の好みや信条はたいへん興味深いし、なにより音楽（に限ったことではないが）をいい加減に受け入れるのではなく、常に立派なものとするでないものを峻別しようとする作法を身につけたことは収穫であったと思っている。また好んで聴く音楽の範囲も当時に比べて格段に広くなっているのだが、楽器も音譜もだめな私の音楽への楽しみを一定ちゃんと支えてくれているのは、ほかならぬ十代でのベートーヴェン「狂い聴き」の体験であるような気がする。

北住淳さんは、私と同じ街・津市の住人で、私が日ごろ尊敬するピアニストである。

この人の存在を初めて知ったのは十五年ほど前、高校の音楽部にいた私の息子が「すごい先輩がいる、天才だ」と興奮ぎみに語ったことからだ。なんでも母校に遊びにきたその先輩は、後ろ手でバッハを、げんこつでショパンを弾き、生徒たちの注文に応じてポップスの名曲をあ

らゆる作曲家風に即興で演奏するという。これが上野のピアノ科在学中の北住さんの一面だった。そういえば一見まじめそうな、ちよつと暗い目の風貌の彼だが、いまでも興が乗ればそのパフォーマンズで、周囲を感嘆と爆笑の渦に巻き込む特異な能力の持ち主でもある。

ハンガリー留学後、(私どもにとつてしあわせなこと)に彼は郷里に定着して広く着実な音楽活動を続けていく。したがって私は彼の演奏に接する機会に恵まれており、その都度感心するのだが、とりわけ二度聴いたラヴェルの「左手」はぞくぞくするほど感銘深かった。彼は津市で毎夏開催される「平和のための音楽会」の重要メンバーでもある。このコンサートは、核廃絶や平和を希求する地元音楽家たちが八年前から、かつて津市が大空襲を受けた七月に、手作り、手弁当で催しているもので、私もその裏方を手伝っている。そして、そこで「今年は北住が何を弾くか」ということが通の聴衆のひそかな楽しみになっているくらい、彼の選曲と演奏は意欲的なのである。これを一例として、彼の地味ではあるが広範で実力ある活動が、私どもの地方の音楽文化に大きく貢

献していることは疑いをいれない。

だが、その彼がどうして京都のロラン生誕記念コンサートに出演することになったのか、驚きと期待をもって私は案内状を見つめていた。それに彼のベートーヴェンはまだ一度も聴いたことがない。

生では初めて聴く一〇一番と、親しい「ワルトシユタイン」の演奏、外の騒音が少々気になったが、小さなホールで身近に、しかも心から音楽を愛する人たちと共に聴くベートーヴェンのピアノ・ソナタは心温まるものであった。そして北住さんは鳴りやまぬ拍手に応えて、(まさに彼ならではの選曲で)アメリカ在住の作曲家ジェフスキーという人の「ブルース」というピースを披露した。彼がここで上着を脱ぎ捨てたのは暑かったからではなく、演奏上の必要からだ。手指だけではなく肘や上膊部を駆使しての、打楽器としてのピアノの強烈で執拗なりズムと、おそらく遠くアフリカにルーツをもつと想像される労働歌の愁いをふくんだ旋律が織りなす音楽は、ベートーヴェンの直後であつてさえ、私の肺腑をえ

ぐる迫力をもっていた。大部分の聴衆も感嘆の声をあげて支持しているようだった。

でも狂信的で単純な「クリストフ教徒」であつたかつての私が、当時このプログラムを聴いたとしたらどんな反応を見せただろう？ つまりベートーヴェンの大曲と、アンコールのこのジャズっぽい現代曲との取り合わせ、それこそがこの夜の何とも面白いテーマであつた。演奏者自身、ジェフスキーの演奏前に、この音楽がもつ積極的な意味について、しきりに解説を試みておられたのもその辺を意識されてのことではなかつたか。

「懇親会」で、ラングドックの赤い酒にさらに気分を高揚した私であつたが、念願かなつて初対面の岡田暁生氏と話すことができた。常々ロマン・罗兰の音楽観、とくに現代（当然罗兰から見ても現代だが）音楽への罗兰の態度などについて大胆で興味深い見解をのべておられる岡田氏は、私の予想よりはるかに若い、いかにも気鋭の音楽史家という風貌だった。この演奏会に北住氏を招いたのも、彼の企画によるものであることが読み取れた。岡田氏は素人の私に対しても、気さくにしていね

いに答えてくださる。「もし、罗兰が今夜のジェフスキーを聴いたら、どう言つたでしょうね？」「私もそれを思つていました。彼は現代の音楽に意外に冷淡でしたからねえ。でも……」。こんなことから始まつて、久しく交わしたことのなかつたような楽しい会話、私が長年ひとり自分なりに考え、暖めてきた罗兰と音楽にかかわる問題の核心に触れるような会話が續くのだった。

きょうの「ロマン・罗兰生誕一三〇年記念コンサート」に参加した人たちのなかでも、ひよつとすると私がいちばん余計に楽しみ、満たされたのではないか、などとにんまりしながら、懐かしい晩秋の夜の東大路を歩き帰途についた。主催者各位に多謝。

（津市在住・賛助会員）

## 今、又、ロランの

### 精神を必要とする時

杉本 峯子

私と、ロマン・ロランとの出会いは、二九年前、今の京都大学の教育センターが、計算機センターとしてスタートしたばかりのコンピューター時代の幕開けの頃、ここで、ライブラリーの開発などに、従事していた頃である。ふつと生協で買った「ペーター・ヴェンの生涯」に、何か、ぐつと引かれて、当然の様にロマン・ロランの作品を探し求めたのである。

「魅せられたる魂」のアンネットの精神に出会った時、今までの人生、おそらく将来も一番、衝撃的な出会であった。このころ、私は、一変してしまった。それまで少女時代読んだ「風と共に去りぬ」に憧れ、明日になればなんとかなる、今を楽しくという様に、楽天的であった

自分に嫌悪感を、感じ始めたのである。アンネットの苦しみ・その精神の気高さを、理解する息子マルク、父の演説を聞いて母を選んだマルク。私は、その精神を追い求め始めたのである。

しかし私はそのころ二五才になろうとしていた。その時代、結婚を意識しなければならなかった私の婚約者は化学を専攻するドクターの学生である今の主人である。彼について説明があるならば「戦争と平和」のピエールという表現がもつともふさわしいと思う。アンネットと自分の結婚を重ね合わせ、悩んだが、結婚生活に突入した。色々な現実問題の中で、仕事を続ける事だけが、私にとつて、ロマン・ロランとの接点をつなぐものであった。そして、三人の息子達も育つていき、巣立つ時、それぞれにジャン・クリストフを与えたのである。「決して良き母では、なかったが、この本は、今までの私の凝縮である、この本を理解してくれたら、母は充分である」と言つて、そして今主人は、抗エイズ薬の開発で、世界的に飛躍しようとしている。私は、今「多変量解析」の授業をもっている。沢山のデータをコンピュータ解析し

て、規則性を見つけ出す面白い数学であるこれは、カオス・フラクタルにも通じていく。

しかし、ロマン・ロランとの出会から三〇年、今、又、私は、ロマン・ロランの精神と対決しなければならぬ時がきたのである。アメリカに留学していた息子が、精神の病を、煩ったのである。今、私はこの困難をどう乗り越えるのか、これまでのロマン・ロランの理解は、仮想のものであった。今ここに、現実を通して、ロランの精神を理解しなければならなくなったのである。はたして、私はこの困難を通して、真にロランの精神を、理解することができるのであろうか。

一九九六年五月一〇日

私が今この原稿を書いている広い窓から見える景色は、目の前に緑のこんもりとした木の葉が窓近くまでびびてきて、その下には広々と緑の芝生が一面に広がり五メートルおき位に色々な花壇が良く手入れがいき届き美しい花々が咲いている。窓をのぞくとずっと向こうにブール際で所々、人々がひなたぼっこをしている。小鳥の

さえずりがどこからかきこえる。私は今ロスアンゼルス  
の美しい町センチュリーシティーのアパートの一室にい  
る。この窓から外の景色を見るとふしぎに子供の頃や母  
の事を思いだす。なぜだか長い間、わからなかったがあ  
る時この庭を散歩していて、気がついたのであるが、こ  
の花壇の一つに南天の木がいっぱい植わっているのであ  
る、そして日本で言ううと紫陽花と菖蒲の様な花がいっし  
よに植わっている。母がいつも葉蘭といっしょに生けて  
いた南天のせいと気がついた。そして子供の頃、裏庭に  
咲いていた紫陽花や桔梗のイメージなのである。

現在このアパートに先ほど述べた息子と滞在してい  
る。下の二人の息子は東京と九州に下宿し、千里山の家  
に常に私をささえてくれた主人と愛犬マリアンを残し、  
そして一人娘であった私を深い愛情で導き、三〇年前、  
これからはコンピュータの時代だ、と言って、物理を  
専攻していた私にコンピュータの授業をとる事をすす  
めてくれた父の残してくれた私のこれまでの経験の仕事  
も日本に残して、いったい私はなにをしようとしている

のか、今精神の病をわずらっている息子とここで戦っているのである。毎日はりつめて苦しい。

私は昔、ロマン・ロランのはりつめた精神に憧れ、共鳴した自分が懐かしい。現実にはりつめた生活は苦しいのである。ここで私は壮大な夢もっているのである。この夢のかなう確立は1%もあるかないか、それをこの紙面に書く事は出来ないがその目的に向かつて一日一日をロランの精神をささえに頑張るのである。

ジャン・クリストフもアンネットも、その目的のために戦いぬいてその過程が素晴らしかったではないか、そのプロセスに我々は感動し共鳴したのであった。ジャン・クリストフは孤独が最大の聴衆であったが、この壮大なアメリカの地に、五二才、一五六センチメートルの小っばけな私が身を置いて、私には励みが必要である。ロマン・ロランを理解し愛する偉大な人々の集まりの「ユニテ」に一文を書かせて頂く事の栄光を励みとして、この広大な大地アメリカから、この夢に向かつて歩み続けることを誓いしたい。

ロマン・ロラン研究所に厚くお礼申しあげます。

一九九六年六月一〇日

少し私の今の仕事の事を述べてみよう。

センチュリーシティーから車で四〇分位のガーディナと言う町にニュートロン・テクノロジイと言うコンピュータの会社がある。この会社は今世界中にネットワークのシェアを持つノベルと言う会社の一例である。ここで合間をみてネットワークの勉強をする事にした。今世界を一つにしたインターネットの発祥の地でネットワークを学ぶ事の意義は想像以上であった。日本でも皆楽しんでいるインターネット、電子メールも元は軍事大国アメリカが国の最高機密として開発していったものでありこれを、この地で学ぶ。歴史の激しい移り変わり、そして平和の重みに胸の熱くなる思いである。今この時代にロマン・ロランが生きていたらどのような思想でどのような生活をするのか、彼とアメリカとの関係については私はあまり知らない。しかし、アインシュタインとロランとの間に親交があった事などが私の心の中を駆けめぐ

る。  
私はまだロランの最終的なものがつかめていない。博

愛主義のような気がするし、又インド哲学のような気もする。クリストフが母に連れられて教会に行くより野原で寝ている時の方に神を感じると言った事が心に響く、そして、最初旅に出るとき、聖書をもった事がキイではないかとふつと最近考える。

一九九六年十二月

ロランは、三回不思議な体験をする。一度はトンネルの中で、そしてスピノザの思想にふれたとき、又朝日の中で、これは我々凡人が感じる事の出来ない、ある波長ではないかと考える。それを理解するためには、宇宙、空間、時間を考えねば、ならないであろう。

もし、私がロランの精神を知らない自分であれば、おそらく人間は、宇宙の自然の摂理から生まれた一つの生物として、恐竜と同じ運命をたどることを認め、次の進化した生物に、人間の英知を委ねたであろう。しかし、ロランの精神を知った以上、私は人間の精神は、宇宙の摂理を越えた尊いものであり、我々人間は、永久に生きのびなければならぬと考える。

そのために、我々は科学を学び、宇宙、空間、時間を

まだまだ説明しなければならない、最低限、太陽系と同じ星をみつけなければならない。

宇宙を知るためには、素粒子を学ばなければならないように、相似系を考えてみる。今流行の数学で、フラクタルと言う分野がある。

これは、自然は相似系の理論で出来ていると言うものである。

例えば、星々のちらばみ、宇宙衛星から見た地球の川の流れ、人間の血液の流れ、そして植物の構造、これらにはすべて、共通の物理法則があると言うものである。

具体的には、すでに観測済みの膨大なデータがあるコンピュータ解析して、次元を求めているのであるが、私は一度、パツフェルベルのカノンデータをデータ分析して、次元を求めてみたら、やはり自然の摂理に共通する次元を求めた事ができた。

この様に、我々の身近なもの、小さいもの、短い時間で、遠いもの、大きなもの、長い時間のことを知る事が出来るのである。

こうして、我々は一步一步前進して、ロランの精神を、



永久に受け継いでいかねばならないと考えるのである。

(なにか、断片的で、支離滅裂な文章になった事を、お許しください)

一九九七年三月

ここで一度、研究所に原稿を送ったのであるが、やはり前述しているロランの最終的なものを理解出来ていないと言う点が、私の中で不安であった。

今、私の精神に必要な事は、ここを理解する事ではないかと言う思いが、増大してくる。

そんな時、「ユニテ」23号の中の落合先生の「ロマン・ロランの面影」の文章が目飛び込んできた。

「人間をふくむ宇宙のすべては『永遠の存在』に包摂統一される」

と言う文章である。そしてロランの若き日の思想、

「自己と宇宙の万物とは本質的に同一であり、すべては永遠の実在の中にある」

もし私が、この文章の意味を真に理解し、自分の言葉になった時、私は救われるであろう。





## トルストイの『クロイツェル・ソナタ』とロマン・ロラン

清原章夫

はしがき

「クロイツェル・ソナタ」この美しい響の名前を持つバイオリン・ソナタは、強烈な意志や情熱、澄んだ境地等が有機的に構築された、中期ベートーヴェンの傑作である。

さて、以前からこのバイオリン・ソナタの「王者」と同じ名前を持つ、トルストイの小説があることは知っていたが、タイトルには魅力を感じつつも、なぜかいままで読まなかった。ただ、哲学者アランがこの曲の終楽章を「歓喜と自由な動きの爆発だ」（一）と書いてるように、小説の方もベートーヴェンの音楽のように、精神を高揚させる感動的な作品だろうと勝手に想像していた。

しかし、今回ロマン・ロラン研究所の読書会にこの小説が使えるのではないかと思い、期待して読んでみたところ驚いた。なんと深刻で暗く、救いのない作品であろう！そして、なによりも「クロイツェル・ソナタ」をはじめとする音楽に対する不当な扱い！

私は読了と同時に、「心によつて偉大な人」として敬愛し「トルストイの生涯」という伝記まで書いたロランが、この作品を読んでどう感じたのか。そして、トルストイが音楽を、とりわけベートーヴェンを非難している理由をどのように分析したかを知りたくなった。

もしかすると、「ゲーテとベートーヴェン」のような私を納得させてくれる、明晰な分析結果が『ロラン全集』のどこかに、見つけることができるかもしれない。そしてそれは、トルストイがベートーヴェンの音楽をまったく理解していなかったことの証明であることを期待して、調べてみることにした。

### 1. ロランとトルストイの出会い

「そしてちょうどエコール・ノルマルの入り口で、一

八八六年の春、私はいま一人のシェイクスピアを——とうとう——生きた人間の世界に発見した……私はトルストイの「戦争と平和」を読んだ。」(2)と「回想記」に書いているように、高等師範学校に入学したばかりの二〇歳のロランは、トルストイを知り級友たちと彼の作品を愛読した。

ところが、ロランはその後トルストイの「われら何をなすべきか」を読んで、驚いてしまう。この時はまだ、「クロイツェル・ソナタ」は書かれていなかったが、すでにトルストイはこの作品の中で、ベートーヴェンを魂の誘惑者であり、官能主義の教師であると非難し、シェイクスピアを第四流の詩人であると決めつけていたからである。

当時のロランは、エコール・ノルマルの受験に失敗するほど、ベートーヴェンやシェイクスピアに熱中していた。特に後者に対しては、「私は私の時間（私の血といつてよいだろう）のいちばんよい部分を彼にささげた」(3)ほどである。

だから、ロランは大変ショックをうけたはずである。

悩んだ末、一八八七年五月と同年の九月にトルストイに手紙を送った。そしてついに、十月二日にトルストイからの返事を受け取った。トルストイの手紙は、ロランの芸術観の疑惑には答えてくれなかった。しかし、外国の悩める一学生にすぎないロランに、返事を書いてくれた行為は彼を感動させた。このことを忘れなかったロランはのちに作家になってから、世界の多くの未知の友に、誠意のこもった多くの手紙を書いた。

## 2. 小説「クロイツェル・ソナタ」

トルストイは一八八七年、つまりロランに最初の返事を書いた年の六月頃に、いよいよ「クロイツェル・ソナタ」を書き始めた。

それは、愛情よりも「セーターや、カールした髪や、ヒップ・パット」に捉えられて結婚してしまったために妄想的な嫉妬にかられて、妻を殺してしまった男の告白である。

この小説のなかで、主人公の妻がピアノ、その愛人がバイオリンで「クロイツェル・ソナタ」を演奏する夕食

会の場面がある。主人公はその時を回想して次のように叫ぶ。「ああ……あのソナタは恐ろしい作品ですね。

それもまさにあの導入部が。概して音楽つてのは恐ろしいものですよ。あれは何なのでしょう？音楽がどんな作用をすると思いますか？なぜ、ああいう作用をするんでしょうね？音楽は魂を高める作用をするなんて言われませんが、あれはでたためです、嘘ですよ！」(4)

よりによって、音楽の中でいちばん純粹で、倫理的なベートーヴェンの作品に対する感想として、これほど見当はずれのものがあるのか！そしてさらに、「たとえ、あのクロイツェル・ソナタの導入部のプレストにしてもですよ。いったい、肌もあらわなデコルテ・ドレスを着た婦人たちの間で、客間で、あんなプレストを演奏してもいいんでしょうか？演奏が終われば拍手して、そのあとアイスクリームを食べながら、最近の話題にふけるなんて。ああいう作品を演奏してよいのは、一定の、重要な、有意義な状況の下に限られるので、それも、その音楽にふさわしいような一定の重要な行為をなしてあげるこ

とが要求される場合だけです。その音楽によってムードをかきたてられたことを演じ、実行するというわけですよ。さもないと、時と場所にも似合わずにかきたてられたエネルギーや情感が、なんらはけ口を見いだせぬまま、破滅的な作用を及ぼさずにはいませんからね」(5)とまで言っている。

この作品でトルストイが言いたいのは、「あとがき」からも明らかのように、「性的欲望こそ、人間の生活における、悪や、不幸の原因であるから、絶対的な純潔こそが人間の理想である」と言うことである。

この極端な考えを主張するために、なぜ悪や、不幸とはまったく関係のない音楽を持ち出すのか。どうしても官能的で情熱的な音楽が必要ならば、例えばフランクの「ヴァイオリン・ソナタイ長調」のように、他にいくらでもふさわしい作品があったはずである。本当になぜベートーヴェンなのか？

### 3. ロランの「クロイツェル・ソナタ」論

ロランは、一八九一年に留学中のローマで「クロイツェル・ソナタ」を読み以下のように、もつともな感想を

述べている。「北国の空の下で私が愛好したロシア小説は、この南国ミナモトの光のなかでは私に尻こみさせた。私はトルストイがその暗い「クロイツェル・ソナタ」の中で、肉と音楽にたいして狂信的な老僧のような呪いを発したので、彼を拒否しかけた」(6)

しかし一九一三年の「トルストイの生涯」の中ではこの作品を、「力強い効果、情熱的な集中、どぎつく浮き上った印象、形式の充実と円熟などの点からいって、トルストイのどの作も「クロイツェル・ソナタ」に匹敵するものはない」(7)と賞賛している。

だが、音楽の扱われ方に対しては、次のように批判してくれている。

「トルストイが心にかかっている二つの問題——人を墮落させる音楽の力と恋愛の力とを混合したのは間違이었다。音楽の霊は別の作品として扱われるべきであつて、この作品のなかでトルストイがあたえた地位は、彼があげている危険を証拠だてるには不十分である。この問題については私は一言する必要があると思う。なんとすれば、音楽に対するトルストイの態度が少しも理解さ

れていないと思われるからである」(8)

ロランは続けて、若い頃のトルストイは涙を流すほど音楽に感動し、実はベートーヴェンをずっと愛していた事を述べている。その証拠は、「幼年時代」や「復活」ことに「結婚生活の幸福」の中に出てくるベートーヴェンの作品に与えた地位にある。しかし、年をとるにつれて、音楽を恐れるようになる。何が彼に起こったのか。なぜかつての美しい思い出と結びついていた、「ソナタ・パティツク」を忘れてしまったのか。ロランは分析する。

「ベートーヴェンのいかなる点をトルストイは非難するのか？彼の力である。「ハ短調交響曲」を聞いて、まったく驚倒し、自分を意のままに服従させてしまった権柄ずくな巨匠に対して、腹立たしげに反抗するゲーテに似ている」(9)

ゲーテのように、トルストイの聴覚や感受性の進化も彼の知性ほど速度がはやくなかったのだろうか。そうではない、彼は生命力が豊富すぎるために、人を滅ぼしかねない、音楽の未知の力に悩まされていたのである。凡

庸な人たちには害を及ぼさないような音楽に対しても、彼の場合は、耳を塞いで防御する必要がある。

そして、ロランの結論は、私が願ったように、トルストイのベートーヴェンに対する無理解を証明してはくれなかった。

「——実をいえば、トルストイはベートーヴェンに対して不当な侮辱を加えたにもかかわらず、今日ベートーヴェンに熱中する大多数の人々よりも深く彼の音楽を感じているのである。彼は少なくとも、この『聾の老人』の芸術の中にとどろき渡るあの狂おしい情熱、あの野生の激しさ——今日の名楽人やオーケストラが誰も感じないものを知っているのである。ベートーヴェンはおそらく、彼の憎しみをベートーヴェン党の愛好よりも喜んだにちがいない」(10)

結果はまったく反対であった。このように、トルストイに対するロランの態度は、ローマで初めて「クロイツェル・ソナタ」を読んで、「彼を拒否しかけた」にもかかわらず、ゲーテの場合と同様に大変公平なものであるといえよう。そして、このような結論を導いたのは、ロ

ランがベートーヴェンを理解するのと同じ深さで、トルストイを理解していたからである。

さて、ロランの結論は明晰だったが、最後に大きな疑問が残った。

「私は、ベートーヴェンの音楽をどれだけ理解し感じているのか？」

(ロマン・ロラン研究所賛助会員)

#### 註

(1) アラン『音楽家訪問』杉本秀太郎訳 岩波文庫

一九八〇年、一二六頁。

(2) 『ロマン・ロラン全集一七 回想記他』宮本正清訳  
みすず書房、一九八〇年、二七頁。

(3) 同右、二二頁。

(4) トルストイ『クロイツェル・ソナタ他』原卓也訳  
新潮文庫、一九七四年、一〇七頁。

(5) 同右、一〇八―一〇九頁。

(6) 『ロマン・ロラン全集一七』前掲書、一〇三頁。

(7) 『ロマン・ロラン全集一四 トルストイの生涯他』

宮本正清訳 みすず書房、一九八一年、三二七頁。

(8) 同右、三二七頁。

(9) 同右、三二〇頁。

(10) 同右、三三〇頁。



ロマン・ロラン年譜

年代	年齢	年譜	参考事項
一八六六年 (慶応二年)	二歳	<p>一月二九日ブルゴーニュ地方ニエール県クラムシーにロマン・エドム・ポール・エミール・ロラン誕生。 父は公証人エミール・ロラン、母はアントワネット・マリー・クロワ。</p> <p>最初の妹マドレーヌ生まれる。</p>	<p>福沢諭吉「西洋事情」 普墮戦争 マルクス「資本論」第一卷 刊 トルストイ「戦争と平和」 (六九)</p>
(明治元年)	六八	妹マドレーヌ三歳で病死。	普仏戦争フランスの敗北
七一	五	二番目の妹生まれる。マドレーヌ(一八九六〇)と名づけられ、兄の生涯の協力者となる。	パリ・コンミュン成立と挫折(七一)
七二	六	クラムシー学院(現ロマン・ロラン学院)に入学。	ベギー、バルビユス、ブルム生まれる
七三、八〇	七	シエークスピアを愛読。	フランス、労働党成立
七五	九	一〇月、ロラン一家パリに転居。サン・ルイ高等中学に転入学。	三国同盟
八〇	一四	スイス旅行。(自然の啓示)を受ける。	ニーチェ「ツアラトユストラはかく語りき」
八二	一六	エコール・ノルマルの入学準備のためルイ・ル・グラン高等学校に転校。この学校でポール・クロードルを知る。	ロダン「カレールの市民」
八三	一七	スイスでヴィクトル・ユゴーを見る。	ベルリン会談、アフリカ分割を協議
八四	一八	スピノザ「エチカ」を読み啓示を受ける。	
八五	一九	ベートーヴェン、ワグナー、シエークスピアに熱中。 エコール・ノルマルの入試に失敗。 三月、ユゴーに面会。五月、ユゴー死す。 エコール・ノルマルの入試に再度失敗。	

八六、八九	二〇	トルストイ、ドストエフスキーを読む。 七月、エコール・ノルマルの入試に合格。十一月、入学。同級生にアンドレ・シユアレスがいた。一二月、ルナン訪問。 トルストイに手紙を書き返事をもらう。 歴史学科を選択する。	
八七	二二	四、五月哲学論文「真なる故にわれ信ず」を書く。これによってロランの思想の哲学的原型が成立する。	仏領インドシナ連邦成立
八八	二二	スイス旅行。セザール・フランクを訪問。	
八九	二三	八月、エコール・ノルマル卒業。歴史学教授の資格を得る。 ローマのフランス学院に留学生として選ばれ、ヴァチカンの古文書館で研究する。	ブーランジェ事件 大日本帝国憲法発布
九〇	二四	マルヴィータとの親交。ソフィアと出会う。イタリア各地の美術館をたずねる。イタリアの自然を享受。	フランス第一回メーデー 日本第一回衆議院選挙
九一	二五	ジャニコロの啓示。 七月、フランスへの帰途、マルヴィータとバイロイトを訪れ「パルジファル」を聞く。「エンペドクレス」と「オルシーノ」を執筆。	教育勅語 大津事件
九二	二六	コレジュ・ド・フランス言語学教授ミシエル・ブレアルの娘クロチルド・ブレアルと一月三一日に結婚。博士論文の資料を集めるため妻とともにローマに旅行、翌年春まで滞在する。	
九三	二七	パリのリセ（中学・高等学校）の教師になる。	日清戦争（九四）
九五	二九	文学博士となる。主論文「近代音楽劇の起源——リュリとスカラッティ以前のオペラの歴史」。副論文「一六世紀イタリア絵画の凋落」。	日清講和、三国干渉 フランス、労働総同盟結成



九六	三〇	一月母校エコール・ノルマルで芸術史講座を担当。学生にシャルル・ベギー、ルイ・ジレール。	
九七	三一	「演劇芸術評論」の編集に参加。戯曲はじめて発表される。「聖王ルイ」(パリ評論)三、四月号)四、一月「敗れし人々」執筆。	ベルグソン「物質と記憶」ドレヒュス事件起こる
九八	三二	「アエルト」の上演と発表。	ゾラの抗議
九九	三三	ジャン・ジョーレスの演説を聞く。戯曲「狼」がドレヒュス事件の精神的高揚の中で執筆され、五月一八日上演、ベギーの書店より出版される。	フランス、ストライキ続発
一九〇〇	三四	戯曲「理性の勝利」出版、六月上演。妻とともにローマに旅行。母方の祖父エドム・クロアの死。ベギーの創刊した「カイエ・ド・ラ・キャンゼーヌ」に協力。	日本、治安警察法公布
〇一	三五	「ダントン」発表と上演。	フランス下院選挙で社会党大勝
〇二	三六	三月、クロチルドと離婚。マインツのペーラーヴェン記念音楽祭に出席。	日英同盟成立
〇三	三七	三月、「七月一日」出版および上演。この上演料でローマにおもむき、マルヴィイダとの最後の会見。五月、一月、高等市民講座の音楽史の講義を担当(一一)。伝記「ミレー」発表。	
〇四	三八	四月マルヴィイダ死去。「ペーターヴェンの生涯」発表。これによってロランは民衆の心をつかんだ。「民衆劇論」刊。「時は来たらん」発表、上演。 「ジャン・クリストフ」第一巻「曙」を発表。つづいて「朝」も発表。パリ大学で音楽史を担当。	日露戦争

〇五	三九	第三卷「青年」発表。アルザス・ロレーヌに旅行。	第一次モロッコ事件
〇六	四〇	第四卷「反抗」発表。「ミケランジェロの生涯」刊。	英仏露三国同盟
〇七	四一	第五卷「広場の市」第六卷「アントワネット」発表。	
〇八	四二	第七卷「家の中」発表。「今日の音楽家たち」「ありし日の音楽家たち」刊。	
〇九	四三	第八卷「女友だち」発表。「七月一日」「ダントン」「狼」を刊。	トルストイ死す
一〇	四四	第九卷「燃え立つ茂み」発表。「ヘンデル」刊。自動車事故で重傷。	日本、朝鮮併合・大逆事件
一一	四五	「トルストイの生涯」、第十卷「新しい日」発表。	『白樺』創刊（一〇）
一二	四六	「ジャン・クリストフ」完結。	モロッコ仏領となる
(大正元年)			
一三	四七	四月から九月にスイスに滞在して「コラ・ブルニョン」を書く。	
一四	四八	「ジャン・クリストフ」にフランスアカデミー文学賞。ツヴァイク、リルケを知る。「スタンダールと音楽」「信仰の悲劇」を書く。	第一次世界大戦
一五	四九	六月、スイスへ旅立つ。フランスへの帰国を自ら断念する。「戦いを超えて」を発表。ゲルハルト・ハウプトマンへの公開状。国際赤十字による戦時俘虜事務所に協力し、奉仕的労働を行う。	ベギー戦死
一六	五〇	論文「戦いを超えて」を含む同名の論文集を刊行。	タゴール来日
		一月アンリ・ギルボアの雑誌「明日」が創刊され最後の号（一九一八年十月）まで協力。ゴリーキー（一八六八—一九三六）との交友がはじまる。	



二九	六三	発表。 マリイ・クーダチエフと会う。「ラーマクリシュナの生涯」刊。 日本人の来訪あいつぐ。 「ゲーテとベートーヴェン」刊。「ヴィヴェカーナンドの生涯」 を刊。 父親九四歳で死す。ガンディー、ロランを訪問。「スピノザの 閃光」発表。	世界大恐慌 ロンドン軍縮会議 満州事変
三〇	六四	「マルヴィーダとの書簡集」刊。「魅せられたる魂」「予告する者」 「二つの世界の死」刊。アムステルダムにおける反戦・反ファシ ズム大会名誉議長。	ドイツ総選挙でナチス第一 党となる
三一	六五	「魅せられたる魂」全巻を脱稿。反ファシスト国際委員会の名 誉総裁となる。ヒトラー政府からのゲーテ賞を拒否。	ナチス唯一政党宣言
三二	六六	マリイ・クーダチエフと結婚。反ファシスト行動委員会の第一 回宣言に署名。	ヒトラー、総統兼首相とな る
三三	六七	「開争の一五年」、「革命によって平和を」刊。	バルカン条約 フランス・イタリヤ協定
三四	六八	ソビエト訪問、ゴリキーの家に滞在。バルビュス、モスクワ で客死。葬儀に関してロランの弔辞をマルローが代読する。	
三五	六九	七〇歳誕生記念祝賀会がブロック、アラゴン主唱で開かれる。 人民戦線政府の後援で「七月一四日」と「ダントン」が上演さ れる。ゴリキーの死を知る。	フランス人民戦線成立 スペイン人民戦線勝利
三六	七〇	パリを訪れる。「道づれたち」刊。	スペイン市民戦争 二・二六事件
三七	七一	フランスへの帰国を決意。ヴェズレーの家を買う。	日中戦争
三八	七二	「復活の歌」刊。 ヴェズレーに移る。	

	<p>三九 四〇 四一 四二 四三 四四</p>	<p>七三 七四 七五 七六 七七 七八</p>	<p>第二次世界大戦 パリ陥落 日独伊三国同盟 太平洋戦争 イタリア降伏 パリ解放</p>
<p>フランス革命一五〇年祭に「愛と死の戯れ」がコメディイ・フランセーズのレバートリーとなる。「ロベスピエール」刊。 病床で著述をつづける。ヴェズレーにドイツ軍戦車隊侵入。クルーデルとの交友復活。 ルイ・ジレーとの交友復活。 『内面の旅路』刊。 『第九交響曲』、『後期の四重奏曲』刊。重病、視力おとろえる。 ソビエト大使館の革命記念祝賀会に出席。「ベギー」刊。十二月三〇日、ヴェズレーにて永眠する。クラムシーのサン・マルタン寺院で葬儀。遺言によりブレーヴの小さな墓地に眠る。 ロラン没後の出版物 ペートーヴェン研究「フィニタ・コメディア」(一九四五年) 「ペートーヴェンの恋人たち」(一九四九年) 自伝「敷居」(一九四五年) 「周航」(一九四五年) 「回想録」(一九五六年) その他日記、書簡集。</p>			

作成者 清原章夫  
有馬通志子

## ロマン・ロラン研究所の活動

- |              |                               |            |
|--------------|-------------------------------|------------|
| 1971. 5. 15  | ロマン・ロランと日本の青年 (映画『ロマン・ロラン』上映) | 宮本 正清      |
| 1971. 11. 27 | 苦悩のなかのインド                     | 森本 達雄      |
| 1972. 6. 24  | ロマン・ロランとフランス革命                | 波多野茂弥      |
| 1973. 5. 26  | ロマネスク美術 プルゴーニュ地方の教会を中心に       | 高井 博子      |
| 1973. 12. 18 | 私の人間観                         | 末川 博       |
| 1974. 6. 29  | 私の通った芝居の道                     | 毛利 菊枝      |
| 1974. 12. 5  | ロマン・ロラン没後30周年記念—講演と音楽の夕べ      | 佐々木斐夫      |
|              |                               | 演奏：玉城 嘉子   |
| 1976. 7. 11  | ロマン・ロランとゲーテ                   | 南大路振一      |
|              | ユダヤ民族と西洋文明                    | 岡本 清一      |
| 1977. 2. 10  | 中国文学とロマン・ロラン                  | 相浦 果       |
| 1989. 4. 20  | ロマン・ロランの反戦思想と現代               | 加藤 周一      |
| 1989. 6. 9   | ロマン・ロラン全集と私                   | 小尾 俊人      |
| 1989. 9. 29  | ロマン・ロランの革命劇から—フランス革命200周年の記念に | 中川 久定      |
| 1989. 11. 17 | ロマン・ロランとの出会いから                | 尾埜 善司・今江祥智 |
| 1990. 1. 27  | ロマン・ロランに負うもの—平和と音楽            | 新村 猛       |
| 1990. 6. 2   | ロマン・ロランとガンディー                 | 森本 達雄      |
| 1990. 9. 26  | 『魅せられたる魂』と私                   | 樋口 茂子      |
| 1990. 10. 26 | 占領時代における日本社会とロマン・ロラン          | 小尾 俊人      |
| 1990. 11. 30 | ロラン・片山・ヘッセ                    | 宇佐見英治      |
| 1991. 3. 1   | ロマン・ロランと私                     | 松居 直       |
| 1991. 6. 4   | ロマン・ロランとベートーヴェン               | 青木やよひ      |
| 1991. 9. 27  | ロマン・ロランとデュアメル                 | 村上 光彦      |
| 1991. 10. 25 | ロマン・ロランの思想の二面性                | 兵藤正之助      |
| 1991. 11. 29 | 初めにロマン・ロランあり                  | 岡田 節人      |
| 1992. 1. 29  | 自伝的諸作品について                    | 佐々木斐夫      |
| 1991. 6. 26  | 〈大洋感情〉と宗教の発端                  | 岩田 慶治      |
| 1991. 9. 25  | ロマン・ロランとイタリア                  | 戸口 幸策      |
| 1991. 10. 30 | ロマン・ロランの革命劇をめぐって              | 鶴見 俊輔      |
| 1991. 11. 27 | 宮本正清 没後十年記念追悼会                | ピアノ演奏：山田 忍 |

	静かにやさしき顔	佐々木斐夫
	ふしぎな静けさ—宮本正清の世界	小尾 俊人
1993. 1. 29	ロマン・ロランの演劇の世界	石田 和男
1993. 5. 24	ガンディーとロマン・ロラン	山折 哲雄
1993. 6. 23	『魅せられたる魂』を語る (前)	重本恵津子
1993. 10. 15	『魅せられたる魂』を語る (後)	重本恵津子
1994. 1. 28	いま、ロマン・ロランを語る	尾埜 善司・今江祥智
1994. 9. 9	ロマン・ロランと音楽	中野 雄
1994. 10. 14	神秘と政治—ロマン・ロラン、その思索と行動のあいだ B. デュシャトレ ロランとフランス革命	河野 健二
	自然科学とゲーテ	岡田 節人
1994. 12. 3	ロマン・ロランとドイツ音楽 —ベートーヴェン、デュカ他作品	岡田 暁生 ピアノ演奏：小坂 圭太
1994. 12. 24	おはなし「ビュールとリュス」と「また逢う日まで」 映画上映「また逢う日まで」(監督 今井 正)	今江 祥智
1995. 1. 27	ロマン・ロランと日本人たち	小尾 俊人
1995. 6. 2	わたしの歩んだフランス文学の道	片岡 美智
1995. 11. 10	ロマン・ロランとR. シュトラウスの周辺	岡田 暁生
1996. 6. 14	ロマン・ロランとの出会いから	鄭 承姫
1996. 11. 16	レクチャーコンサート ベートーヴェン：ピアノソナタ 第21番、28番	岡田 暁生 ピアノ演奏：北住 淳
1996. 11. 18	「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロラン	本山 美彦
1997. 1. 17	「主体的精神と普遍の人間愛」ロマン・ロランと魯迅	區 建英

月例会の《読書会》は181回（日本ロマン・ロランの友の会時代から数えると356回）を迎えます。「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」をはじめ、ロランの諸作品を、読んでまいりました。1992年からは「ロマン・ロランと音楽」をテーマに神戸大学助教授岡田暁生氏を講師に自由な雰囲気です。

# 財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長 宮本 正清

ロマン・ロラン（一八六六一—一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないのであります。

しかし、ロマン・ロランの真の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、真に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を墮落と頹廢から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現在のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研究した数巻にわたる著述の

中で、東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。

このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために、喜ぶべきことと信ずるのであります。

1970年12月

## ◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー

公開講座

●講演会

●読書会・研究会

## ◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

●ロマン・ロランの著作に感動、また

●彼の周辺の芸術家たちに興味、

●あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感  
いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。

●特典①機関誌「ユニテ」の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。

●会員①一般賛助会員は年会費一〇五〇円。特別賛助会員は年会費十〇以上。

（以上・敬称略）



感謝 1996年度

賛助会員、寄付者名簿 (アルファベット順・敬称略)・特別会員

- 有馬通志子 蘆田ひろみ 浅井 幸 芦田 友秀  
 安倍 道子 ブリユーネ・アンドレ  
 シッシユ・D・由紀子 出口 治男 濱田 陽  
 法蔵館・社長 西村七兵衛 浜田美智子  
 福田 真人 福井 友栄 福田万紗子 福岡 美彦  
 古家 和雄 本郷美智子 林 次郎 日野三三代  
 樋口 茂子 石丸 啓子  
 ・稲畑産業株式会社・社長 稲畑勝雄 井土 熊野  
 井土 真杉 伊砂 利彦 乾 昌明 岩坪嘉能子  
 石塚 重雄 加藤 澄子 河合 一穂 狩野 直禎  
 清原 章夫 喜多 寿子 近藤 正雄 河田 厚公  
 岸田綱太郎 小牧 久時 栗林 弘 松居 直  
 宮内 幸子 ・みすず書房・社長 小熊勇次  
 美木 陽子 前田 仁 前田 和子 前田 政昭  
 本野 妙子 森内富美子 森本 達雄 宮本エイ子  
 森久 光雄 虫賀 宗博 村上 光彦 松井 菊恵  
 成田 雅美 西村喜代子 西原久美子 永田 和子  
 能田由紀子 西谷 玲 西成 勝好 野村 庄吾
- 鍋谷 郁二 中津 雅野 野口 榮子・小尾 俊人  
 小田 秀子 折田 忠温 大出 學 落合 孝幸  
 大川起示子 岡部 素行 奥 和義 奥 彦徳  
 ・尾埜 善司 大谷 史朗 大谷 暢順  
 大谷 綾乃 大谷佳世子 李 修京・千 登三子  
 ・佐々木斐夫・三友居・社長 山本 勝 坂谷 千歳  
 佐藤ミサエ 佐藤てる代 佐久間由紀子  
 志賀 鍊三 杉本千代子 杉本 峯子 鈴木 文代  
 新宮恵美子 杉田 谷道 田中阿里子 田代 輝子  
 谷口 良則 多田 淳子 谷口けいこ 長 美穂  
 千阪 靖朗 梅原 ふさ 氏家 玲子 宇佐見英治  
 安田 俱子 山下 雅子 吉原 圭子 山本 信子  
 八木美佐子 山下 真子

計(一、一八〇、〇〇〇円)

## あとがき

昨年はロラン生誕二三〇年、財団法人設立二五年を記念し、研究所の活動も多様で活発なものとなりました。その仕事のあとを、文字でご報告申し上げるのが、本「ユニテ」24号のおもな内容でございます。

本山美彦先生の演題はもと「戦間期のリベラル——経済学から見たロマン・ロラン」として、関西日仏学館でのお話です。新鮮な切り口で、いまままでに何人も試みなかった角度からロランの存在を、歴史的かつ思想的な現代的照明をあてて、聴衆に大きな感動を与えられました。小さなホールで、こうした知的な雰囲気で充溢した会合が持たれるということは素晴らしいことと改めて実感いたしました。

「ロマン・ロランとアジア」というテーマで二人の講師をお招きしました。中国の區建英、韓国の鄭承姫の両先生です。區さんは文化大革命の嵐を潜りぬけて来日され、福沢諭吉ほか日本の思想史を研究しておられ、鄭さんはフランスのデュシャトレ教授の指導を受けられた方です。私たちの未知の原野に曙光を与えて下さったことに感謝いたします。

ロラン記念コンサートのピアノ演奏とお話は北住淳先生、

岡田暁生先生です。ペートルヴェンのピアノ・ソナタ、第二一番、第二八番。「北住淳氏はピアノ界の荒俣宏」ともいうべきデモニッシュな鬼才である。浅薄な商業主義によって作り上げられた虚構のスター達に飽き足りないすべての人に氏の本物の音楽を強くおすすめしたい」（岡田暁生）。すばらしい夕べ。岡田先生のご紹介（本集に収録）は、ロランとアドルノの対比でご説明があり、大変刺激的で演奏そのものとともに、会場を唸らせました。アドルノの「ペートルヴェン…音楽の哲学」は最近、日本訳が出ましたが、この中にはロランの研究の引用もあります。音楽社会学者アドルノはペートルヴェンについて、「社会の手で仲介された諸形式を場として展開され、個人的な感情表現を禁欲しつつ一定の方向づけを持った社会闘争の反響をひびかせているペートルヴェンの音楽は、まさにそうした禁欲から個人存在の充溢と威力を引き出している」（「ミニマ・モラリア」97）と書いております。

「ユニテ」編集部

小尾俊人

野村庄吾

西村七兵衛

宮本エイ子

小尾俊人

表紙 装丁



ユニテ 第二十四号

発行日 一九九七年四月二十五日

発行者 (財) ロマン・ロラン研究所

理事長 尾 埜 善 司

京都市左京区銀閣寺前町三三

電話・FAX

(〇七五)七七一―三二八一

郵便番号六〇六

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九一五九九九六

印刷所 (有) 恒 星 社

←表紙 魯迅とその著書の装幀文字「呐喊」